CLARKE氏の思出

Clarke 氏が大正五年上田柳村教授の後を承け、厨川白村教授を援けて、京大の英文學の正教師の任に就かれ、以て後進學徒の誘掖に盡くされて以來約十七八年になる。本年春退職後に至つて、年來の宿痾のために、溘焉として逝かれたことは、殊に京大の英文學界のために惜むべきことである。私は同氏とつい親しくする機緣もなく、わづかに文學部の教官室だの廊下だの事務室だので挨拶の辭を交換した外、一昨年の三月まで約十年の間を通じて毎年一回だけ、英文學の卒業學生の卒業論文の口頭試問のをりに、立合ひを命ぜられて試驗室に陪席して、その懇切な音容に接しただけにすぎない。論文の紙面に訂正や批評やを、細かい美しい赤インキの文字を以て記入した篤實さと、試驗場裡に於て學生に對してやはり細いやさしい聲音を以て質問したり教訓したりした懇切さとを、いつもいつも嘆服し且つ崇敬してゐたのであつた。試驗場にはいつも二三冊くらゐ

の小形の美しい新刊本を携帶して來て机の隅などに置いてあつたのを見かけた。時にはそれを私に示して一々その面白さ、或はむしろ其の本の美しさを說いてくれなどした。Clarke 氏の愛書趣味はまた格別であつて、書物を愛護し愛藏される心づかひの深さは、人々の知るが如くである。英文學卒業試驗場の樂しみ、試驗立合の副產物、年々歲々新しい珍しい美くしい本を見せられた有難さ、もうそれも昨年の春からは、接することが出來なくなり、心さみしさに堪へなくなつた。

Clarke 氏の藏書の主要な部分は、京大の英文學研究室に所屬せしめて Clarke文庫として寄附される筈になつたと確聞するが、それによつて故人と吾々との、故人と京大との因緣は永久に結ばれるわけである。有益な資料を其中に見出し得ることは勿論であるが、故人を偲ぶよすがともなつて誠に結構なことで、未亡人および遺族のかたの篤志を感謝すべきである。

大正十一年の春、英國皇太子が來朝のみぎり、本大學にも御成りになつたことがある。圖書館でも、日英關係の回顧に資するため、歷史的文獻を陳列して台覽に供したが、そ

のをりClarke氏には、圖書館として色々配慮にあづかり、殊に英文の書誌について様様の指導に接したことであつた。同氏もむろん厨川教授と共に拜謁の榮に浴したのであつたが、同氏としては、あちらがあちらであられたから、かなりつとめて出て來たらしかつたのである。珍しいといへば珍しい出席であつたその折の展觀にClarke氏珍藏の"FAR EAST"と題して明治初年の横濱か東京かで、現物の寫眞を主として限定版で頒布したグラフ式の刊行物を貸してくれたことがある。現場に出陳したかどうか、今記憶にもなく、展觀書誌も今すぐ出て來ないから判らないが、その後何でも神戸での賣立(オークション)に彼の本があるから圖書館で買つておいたらどうだと、例の細字の書狀で懇切に知らせてくれたことがあつた。然し遂に手に入らなかつた。本屋の目錄だの、個人の賣立だの、その他個人の賣却希望だの、さういふ機會に、數度圖書館の私にそれを報告してくれた深切に對して、いつも感謝せずには居られなかつたのであつた。又このたび同氏の追想記をかくにつけても、さういふ書物關係のことが先づ思ひ浮ぶのである。

（「ALBION」昭和九年七月號）

デカメロンの邦譯本

ボッカチオの歿した紀元一三七五年、卽ち今年から五百五十年前は、日本でいふと吉野朝のなかばすぎ、天授元年にあたるが、このとき彼は行年六十であつた。我國文學史でいふと、太平記の作者に擬せられた小島法師なるものが逝いた翌年になるのだ。デカメロンの著作を凡そ一三五〇年頃としておくと、この年には徒然草の兼好法師や、昔誤つて太平記の作者ともされた玄惠法師が入寂した。兼好があの隨筆で一種の女性觀を披瀝し、此野史で高師直の色ぶみの一件を暴露されたりしたのは、デカメロンの出來る少少以前のことだと思ふとちよつと面白い。さてこの作はボッカチオが三十五歳の男盛りに成つたものだが、知命に達した私がいまさら若がへつて、その邦譯本などと尻馬に乘るのは氣はづかしいとは云ふものの、玉のさかづきたまにはよからうと思つて、そこは例の古くさい話を致すのである。

私が既に「書物禮讃」の創刊號に書いたやうに、ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオの伊太利亞詩文の三大家が日本人に知られたのは夙く明治初年にあつた。明治二年十月の凡例がついて三年の出版である『西洋易知錄』といふ纂譯書の卷四の下に、まづダンテについては、「千二百六十五年フロレンスに生る、アルヂリ家の一族にして、政權を爭ひし人なり、伊太利の詩の大家なり、其著す所の詩ヂヒナコメジヤ曲名といふは未來の夢を說きし高名の詩なり」といひ、ペトラルカについては、「伊太利詩の大家なり、深くラウラといへる女を愛しければソンネツトといへる詩篇を作りて其才美を稱しけり」と書き、さて最後にこのボッカチオを誌しては、「千三百十三年フロレンスに生る、其著せるラテセード詩名(新村云、La Teseide をいふ)といへる詩篇は始めて任俠の事を作りし詩なり、シヤウセル(又云、チョーサーのことなり)其詩に基きて義士詩談を作れり、然しこの人は詩よりも特に文章に巧みなりし、其著すところのデカメロン書名といふ小說あり、一百條の物語を集めたるいと面白き書なり、三百八十四年に死す」と述べてゐる。記す所に誤謬もあるが、文致の古めかしい所が面白く讀まれる。この西洋易知錄刊本六

冊は、明治初年代の有名な法學者河津祐之が若い時に英國の著述家ウヰリアム・フランシス・コリアー W. F. Collier すなはちコルリイルの The Great Events of History といふ初學西洋史大綱を譯述したものである。

閑話休題、デカメロンの全譯本のあらはれたのは、私の現に知つてゐる所では、明治の末年から四種ある。明治四十三年水野和一氏の譯本、大正五年戸川秋骨氏の譯本、大正十二年大澤貞藏氏の譯本、いづれも十日物語と銘を打つたが、本年出た梅原北明氏の譯本はデカメロンと原名の儘である。戸川氏のが最も著名であつたが、私は「書物禮讃」にはそれをおとしてしまつた。全譯でなくて個々の小話を譯したのでは、三十年前明治二十八九年に尾崎紅葉のが三話、更に十年遡つて明治十九年二十年に單行本で三つ四つあつた。

紅葉のは實は翻譯といふよりは翻案と梗概とである。三種とも紅葉全集卷四(明治三十年刊)に收めてあるが、其中の二つは明治二十八年七月出版の『四の緒』に出たもので、第五日の第九話から名高い鷹料理と、第七日の第九話から三箇條とを取つた。前者

は西洋文學にも換骨脱胎でいろ〳〵に使はれてをるやうだが、私も往年「鷹狩」の一篇中に利用したことがあつた。紅葉が第八日第七話を、初め翻案で、半ばほどからは梗概のまゝで、冷熱と題して讀賣新聞に出したのは、明治二十九年であつた。さすがは紅葉の文章にこなされて話が上手に出來てゐる。

私たちの知つてゐる最も古いデカメロンの小話の單行本では第五日の第七話から取つて翻案したのを明治十九年十月に出版した一小冊『想夫戀』である。ア・サベチエー・カストルA. Sabatier Castres のボッカース抄 Contes de Boccace と題する佛譯本から譯出したので、譯者は佐野尙、そして菊亭醉といふ人が補閲し、田島象二等の三家の合評を附けてある。扉繪口繪挿繪あはせて四枚あつて、それが佛人ビゴー G. Bigot のエッチングのみごとなやつである。和紙摺活字四六版の和裝本、本文が四十六枚緒言奥附等が四枚。文體は在來の人情本式で、緒言にも吾國のお染久松の狂言に似て稍高尙の樣だなどと云つてゐる。私がこの本を「書物禮讃」や記念講演會で披露したりしたと同じ月の「書物往來」では、齋藤昌三氏が「明治初期のデカメロン」と題して同じく『想夫戀』を而もビゴーの挿繪を載せて紹介された。私は數年來京都大學圖書館の笹岡司書の舊藏本を借りて見てゐたのであつたが、最近英文學研究室の黑田文學士も京都で一本を得られた。さてこの本の奥に同じ譯者佐野尙が同年翌月に『女皇春遊傳』といふ一冊の單行本をやはりビゴーの挿繪で上梓するといふ豫告が出てゐる。出たか否かは私も知らないが、多分出なかつたらうといふ魯庵君の說を齋藤氏は引かれた。

右の外、嚮に私は內閣文庫の目錄で近藤東之助譯、明治二十年刊で十日物語中の一話を綴つた單行本が二冊あるのを知つたが、未だ現本を見る機を得ずに居た。その一は、『密夫之奇獄』、他の一は『鴛鴦奇觀』である。やはりカストルの佛譯本から取つたものである。前者については齋藤氏の紹介があるが、私はその本を未見である。後者はその後東京大學の奥平法學士から寄贈を受けて一讀する幸を得た。とびらや表紙には近藤の重譯、菊亭醉の閲となつてゐるが卷首には菊亭の譯述としてある。明治十九年十一月の緒言がついてゐる。洋紙摺洋製本で挿畫は尾形月耕、本文四號活字六十三頁、對話は口語と文語と交錯し、文體其他は舊來の如くである。今その話は原本の何日目の第何話に

出たかを調べて見ない。

紫影博士は最近或譯本でデカメロンの一半を讀まれての感想を私に書送られたが、「案外に面白からず、西鶴の方が上かと思ひ申候。支那小說の僧尼、藥海と能く似たものにて餘り不倫の事許にて不快を感じ申候」とある。一つは譯文の出來にもよることであらう。私はあながち紅葉ぶりにとはいはぬが、當氣味なくまぢめに原文から翻譯して、例へば山川丙三郎氏のダンテ神曲の翻譯のやうに但しもつと精練輕妙な筆致を以て、デカメロンを紹介する人の現れる事を望む。敢て全譯には及ばない、以前のやうに一話一話の選譯にても差支ないから、記念すべき今年を期として日本の外國文學界はさういふ方面に何か遺すことは出來ないであらうか。（大正十四年七月二十八日）

（「藝文」大正十四年七月第十六卷第八號）

明治初期の飜譯

大正年代の末からこちらへ、明治時代、殊にその初期における文化の回顧や研究が廣く行はれ、從つてその資料や飜刻が盛んになつて來て、雜誌に單行本に叢書に、また古書界に展覽會に、明治文化の資料が、各種にわたつて持てはやされてゐるのは、昭和の新文運における著しい現象である。この機運は、吉野博士が總理の下に、幾多このがはに造詣の深い練達の人々を網羅して、一大統制をもつて編纂されつゝある日本評論社の明治文化全集の刊行を見るに至つて、正に絕頂に達したといつてよい。この叢書が、その體系の整然たる點において、その編輯の周到なる點において、その校正の嚴密なる點において、その裝幀の堅實なる點において、確かに群を拔いてゐることは、何人も認めるところである。しかもその最初の配本たる飜譯文藝編は、われら國民がお慕ひ申す明治天皇、その天皇を記念し奉る所の最初の明治節の前後に際して世にあらはれた。あに

偶然ならんやと私たちは叫びたい。

菊版六百五十頁の大冊、茶褐色の地味な表紙のかけには、前後兩面それ〴〵違つた見返しに、明治初年の繪入本から採つた色摺の畫を配した手ぎは、收むるところの明治初期の飜譯文學十二篇、一々の原本の體裁を出來るだけ保存しようと試みた親切さ、戸びらや奥付、原字の字形假名づかひそのほか一線一點までも成るべく變へまいとした細かさ、あらゆる方面にぬかりのない努力は、少しでも古書の飜刻を批閲しまた經驗したことのある人たちが直に洞察し得る所であらう。ルビ付細字二段組の印刷を殆ど誤植を見出し得ぬほど嚴密に校正を了して、恰も古典の校勘に對する場合にひとしき敬虔な態度をとられた跡を私たちに示されたことは敬服すべきである。

十二編中の最も多くは明治十年代の譯本であつて、沙翁の三編とそれにラムの筋書本一編、今は忘れられたスコットが二編とリットンが一編、それにボッカチオが二編、そのほかイソップ物語とフェヌロンのテレマック物語、それぞれ當代の特色をのこせる文體を以てこなされ、私たちはゆつたりとした氣分で昭和から明治の初めにかへりつゝ、

西洋文學を味はふの樂しみを與へられる。沙翁には井上勤氏のヴェニスの商人、坪内逍遙博士のシーザー等、譯文の面白さ隔世の妙味がある。ロメオ劇の人情本めいた飜譯振りもなか〳〵ありがたい。殊に稀代の珍とすべきは、吉野博士が收錄された神田孝平の和蘭美政錄であつて、それは文久元年の古きにさかのぼる。歴史的に觀て最も貴重な材料である。それに次ぐのは、私の特に興味をひく渡部溫の伊蘇普物語である。曉齋と篁村と梅南の挿繪が私の目につく。それらのみではない。ボッカチオの想夫戀中のピゴーの畫の如きは、更に珍重すべきものと思はれるが、毎篇さしはさめる所の挿繪は、いづれもノンキな鷹揚さ加減が私たちの心をたるませてくれて嬉しい。

解題は、それ〴〵好學の人々が分擔して精緻を盡くしてある。私にとつては緣故の深い渡部溫氏の略歴が吉野氏や松崎實氏によつて明かになつたことと、明治新譯本の伊曾保が世にひろく知れてきたこと、先以てよろこばしい事といはねばならぬ。その他、柳田泉氏のリットン及びスコットに於ける、高橋邦太郎氏のフェヌロンにおける、齋藤昌三氏、神代種亮氏のボッカチオにおける、蓋し解題者當を得、解題また要を得てをる。

校正の神神代君とうたはれるその人が沙翁の諸編を擔任されたのも、私たちを首肯させずにはおかない。要するに、毎篇校勘者解說者各その人を得てをるを以つて、讀む者と知る者とをして信賴せしむるに足ることは、私の敢て明言し得るところである。

加ふるに、卷末に添へた柳田泉氏の明治初期飜譯文藝年表（明治四年乃至二十四年）は、重寶この上なき編著といはねばならぬ。私は元來年表が大好きで自分でも年表を作るのが癖であるので、格段注意したのであつた。毎卷添付せる「明治文化」と題する數葉の紙片の如きも參考とすべき點が多くて棄てられぬ。後日一纒めにして製本保存すべき價がある。

（「東京日日新聞」昭和三年十二月廿六日）

飯島花月翁紹介の安政二年新渡和蘭書目

信州上田藩の蘭學者にして兵術家たる赤松小三郎維敬が安政二年（西紀一八五五）長崎に修學したをりの日記から新輸入の和蘭書の書目を抄出して、同郷の飯島花月翁が本誌前號に於て紹介されたのは幕末明初の學術史文化史上の資料として重要な貢獻である。殊に注文者の名までが錄してあるのは注目すべきである。書名や著者名を原語原字に還元するのは、この場合さまで困難ではないやうに思はれるけれども、私の昨今の事情では直に著手しかねるから、それは後日に期する。さしあたり靜岡の葵文庫に所藏される舊藩の蘭書などと對照してみたら得るところがありさうに思はれる。自分は他日歸郷中小閑を得て彼此對比してみたいと思つてゐる。今はたゞその書目を內示されたに對して取敢へずその有益な資料の提供を感謝するにとどめるのである。

昭和三年五月廿四日　（「本道樂」昭和三年七月號）

柳亭種彦が浮世形六枚屏風の歐譯

柳亭種彦（天明三年生天保十三年歿六十歳）の凡作にすぎない合巻臭草紙の浮世形六枚屏風（六巻）二冊物が、歐洲諸國の言語に飜譯されて一頃彼土にもてはやされたこと程不思議な話はない。

この草双紙は文政庚辰三年七月稿成り、翌年の辛巳四年正月の發刊であつた。即ち西暦の一八二〇年に出來て、陽暦では多分同年の末あたりに發賣されたものと見てよい。シーボルトが來朝に先だつこと三年である。さればシーボルトが日本を去つた天保元年の一八三〇年には、この小説本を彼は和蘭に持つて歸ることも出來た筈である。從つて彼がホフマンと共に編輯刊行した蒐集書目のうちに、その書名を見出すのである。該書目は、ライデンに於て一八四五年すなはち弘化二年に出版されてゐるが、かの小説は鏡山だのお染久松だの妹脊山だの一の谷嫩軍記だの忠臣蔵だのといふ名作と共に將來されたのであつた。

シーボルトが本國に歸着したのは、一八三〇年の七月七日であり、それから十五年後の一八四五年に、六枚屏風は前記の書目に著錄されたのであるが、更にそれより二年後の一八四七年すなはち弘化四年にあたる年に、それが墺國に於て獨譯されたのである。

その獨譯者は、日本の言語文學等の研究卒先者を以て名高い墺國のアウグスト・フィッツマイエルである。萬葉集の歌を獨譯したりアイヌの語學書を著はしたりしたのでも古くから日本にきこえてゐる。一八〇八年八月十六日カールスバードに生れ、一八八七年五月十八日キーン近在に八十歳で終つた人である。即ち文化五年の生れで明治二十年に歿したのである。初めプラーグ大學に法學醫學を學び、後博く諸國の言語に通じ、一八三八年（天保九年）に維納に遷り、後一八七八年墺國學士會員に選ばれた。學士會院雜誌にはその著述が多くあらはれてゐる。

フィッツマイエルが種彦の浮世形六枚屏風を獨譯した一八四七年の後に、それを日本文學譯本（ペレストマチー）のうちに再刊したこともあつたが、明治二年の冬すなはち一八六九年に於て、その原本を江戸で木版に飜刻したことがある。豐國の繪を全部削つて、平假名を漢文ま

じりの讀み易い形になほして、とびらの上に英文を入れて、西洋人が日本文學の原本を讀むのに都合よくした樣にも見える。それと同時に抄譯した英文の譯文をも出版した。それら二種の本は、石川巖氏が書物の趣味第四號（昭和四年の三月成稿六月出版）に於て詳介された。但し古く饗庭篁村翁が初期の早稻田文學の上にその飜譯の事を紹介されたことがあり、私たちも當時見たことがあつたが、石川氏は篁村翁及び其他の人々の紹介の誤謬と不備とを補訂されたのである。

私は近ごろ明治初年英京で牧師サンマーズ氏が編輯出版してゐた東亞研究雜誌のフェーニクス第一卷を閲して、かねてウェンクステルンの日本書史に依つて知つた所の浮世形六枚屏風の英譯を見ることが出來た。『日本娘ミサヲ』と題した三回續きの飜譯である。日本語から飜譯したと銘打つてある。譯者はマラン Malan といふ牧師である。掲載されたのは右フェーニクス誌第十號第十一號第十二號の三號にわたり、一八七一年の四月五月六月と相つゞいてゐる。都合二欄十七頁にわたる細字印刷であつて全譯であるといつてもよい。一八七一年は明治四年にあたるから、多分明治二年の翻刻本を底本と

して譯したのであらうと思はれる。

未檢ではあるが、六枚屏風の原文及びローマ字書きを添へた佛譯が晩採草といふ雜誌の第二卷第三卷に出てゐるといふことである。明治八九年にわたる一八七五、七六年のことで、瑞西のジュネーヴで發行された雜誌であつて、日本では東洋文庫に備へつけてあるから、見ることは容易である。譯者は明治の日本文學紹介者を以てきこえた伊太利人トゥレッティニ Turettini である。

然るに、この人と共に並び稱せられるセヴェリニ Severini といふ伊太利人が、今度は六枚屏風を伊太利文に譯した。それは一八七六年七七年すなはち明治九年十年にわたつてのことで、フィレンツェ發行の伊國東洋研究小誌の第一卷に於て八回にわたつて續載したのである。これも私はまだ見てゐない。

以上の佛譯も伊譯も共に、『小松と佐吉』といふ題で出てをることは、ウェンクステルンの日本書史によつて知られるが、私の想像では、或はマランの英譯を佛文に重譯し、或はまたその佛文を更に伊譯したのではあるまいかと思はれる。これは他日おひおひ確

かに報ずることが出來ようと思ふ。

日蘭貿易時代に和蘭に傳はつた小說でありながら、却て蘭譯本は出なかつたのも時勢である。獨譯文が一八四七年の弘化四年に墺國首府にあらはれ、英文抄譯本が一八六九年の明治二年に東京で出版され、英文の殆ど全譯文が一八七一年の明治四年に英京にあらはれ、佛譯が一八七五年七六年の明治八年九年に瑞西の壽府にあらはれ、伊譯が一八七六年七七年の明治九年十年に伊國の名都フローレンスにあらはれてゐるといふ始末。種彦たるもの餘榮ありといふべきである。なほ博雅の士の補充を待ちもし、私自身でも增訂を怠るまいと思つてゐる。（昭和四年十二月一日〈「佛敎文學」昭和五年一月號）

西洋印刷文化史

これは米國の印刷美術研究所長たるオスヴァルド・クライド氏の近著を玉城肇氏が譯して東京の弘文莊より出版した菊判二倍大の美本で、全編二十九章と參考文獻書目と索引とを合せて五百頁近い一大冊、美麗な圖版とカット挿繪等百四十圖を添へたもの。わが邦において西洋の印刷術の沿革と進展の跡とを簡明に知らんとする人々のために最も適當な手引草であり參考書である。從來日本においてこの種の著作や譯述が現れないではなかつたが、少くとも今日までのところ、この本に越した好適なものの無かつたことは確言出來ると思ふ。おまけに活字の組方がいかにもゆつたりと體裁よく組まれてをり、鮮明な挿繪のほかに、幾多の西洋古活字本の標本が極めて美はしく複製されてをるがごときは、原本を見ることの出來ない日本の愛書家には、殊に歡迎されるに違ひない。活字印刷の史的發達を敍述したのちに、紙のことも書いてあれば、裝幀のことも擧げてあ

る。むろん活字鑄造のこと、整版彫刻のこと、いづれも簡明な記述に要領を得させてあるが、さらに進んで印刷者教育に關し印刷業組合に關して必須な知識を供してあるのは、著者が單純な愛書趣味者ではなく印刷藝術研究所の管理者たる職務がらにも由るとも見られる。

要するに、日本に在つて、西洋の印刷術の過去と現在とを最も容易に最も面白く知らんと欲する讀書子と愛書家とに對してはもちろん、圖書館にも印刷所にも、均しく座右の參考書として具ふべき書たるは、決して過褒ではない。裝幀が純白クロースの上に金色の淸楚な、フロレンチン式の唐草模樣をおいた工合はさつぱりして雅人の氣にも入らう。いやみな、けばけばしい所謂豪華版の比ではない。

本年は書物藝術上に名高い詩人キリアム・モーリスの生誕百年記念を迎へる。モーリスの活字印刷に關する事跡を初め、歐洲幾多の私家版藝術的印刷のことも本書中によく敍述されてゐる。モーリスの記念としても相應はしい譯述事業であつたと申さねばならぬ。

（昭和九年四月十一日）

ラグーザお玉

木村毅氏の事實小說

今春正月から大毎東日の夕刊紙上に木村毅氏が事實小說「ラグーザお玉」を連載するといふ豫告を暮れの新聞で見出した時は、私は無上の喜悅を感じたのであつた。それはその豫告の出るより十日ばかり前に、京大の伊太利亞會に於て、私は明治初期に來朝して日本の若き藝術界を指導してくれた三人の伊太利人キヨソネと、フォンタネージとラグーザとの事を略述したをり、ラグーザの事蹟は全く未詳であるから、後日にゆづると斷つておいた所が、そのラグーザが思ひもかけず親しい友人の手によつて事實小說となつて現はれることとなつたからである。何たる幸ぞと私は喜びに堪へなかつたのであつた。

正月中旬に東上したをりに、木村氏からお玉夫人の畫稿を見せてもらひ、二月初には

展覽會を大阪に見にゆき、其の前にはサンデー毎日に於ける回想錄や訪問記を讀み、それやこれやでラグーザ夫人に對する興味がいよいよ募つて來たのであつたが、私はひたすらそれらの記事や其日其日の夕刊を切拔き張込みすることを樂しみにして居た。やがて單行本になつて現はれるであらうと期待しつゝあつたが、かうも早く刊行されようとは夢にも想はなかつた。

本文に木村莊八氏の特色のある挿畫を加へたのは勿論だが、裝幀もカバーもおなじ畫家の手に成つて瀟洒な初夏向きの趣味で、卷頭にはラグーザ氏の肖像とお玉夫人の肖像や作品や筆蹟などを添へ、本文の前後には作家木村氏の伊太利旅行誌や實話小說に對する意見、小野七郎氏のお玉夫人訪問記および挿畫をした木村畫伯の感想談等が附いてゐる。

明治初期の新文化の歷史がラグーザとお玉夫人の生家淸原氏と、その周圍の人々とを透して鮮明に活き活きと描寫されて、その時代の世相や人情や藝術界を背景にして、お玉さんとラグーザとが浮きやかに吾々の眼に映じてくるのは恰もパノラマを見るやうな

感がある。作爲と事實、ディヒトゥングとヴァールハイト、その兩方が巧に織成されてゐる手際は十分に認めておいて可いのであるが、會話の點に於ては、時々關西式の語法が混入して來て耳障りとなることもあつて、未だ十分に洗煉されてゐるとは言はれまいと思はれる。

回を重ぬること既に八十、今や第一篇だけを了つたのであるから、續篇の現はれるのは此の秋か來春かと、讀者をして鶴首せしめること一通りではない。お玉さんは唐人お吉に比べると、ドラマチックな點はない代りにロマンチックで可憐であり、品位と道義とを兼ね具へてをるので氣持よく讀者を引寄せることが出來る。池長孟氏が「開國祕譚」の戲曲に於て描いた神戸のラシャメンお蘭の構想とも大分違つて一つには其の形式が單純な實話小說でもあるから「ラグーザお玉」はまことに心地よく氣樂に讀まれるのである。

末の二章ほどは筆行きがちと急卒に過ぎた感がしないでもない。回數の制限と作者渡米時日の切迫とから來たのであらうが、描寫が簡潔に失した憾があるやうである。殊に

「新生活」の一章十節の如きは小説としてはもつと悠々と書いてもらひたかつた樣な氣がする。尤もこれは或は私の如き古い讀者の古くさい註文かも知れない。

お玉夫人の姪御さんの清原初枝嬢もパレルモへ出掛けたし、作者木村君もアメリカからシチリアへ廻つて來るかも知れず、事實の調査も著想もいよいよ進まうし、續篇の掲載が待たれること多大である。昔渡來した南蠻の伴天連のシドッチ卽ち新井白石に調べられた彼のシローテも、お玉さんのゐるパレルモの出身であるし岡本三右衞門と名乘つたキアラ卽ちコウロといふ伴天連もシチリアの人である。濱田靑陵博士が大正三年の初夏パレルモの勝景を探つてほのかにラグーザ夫人の事を耳にして南歐遊記に書いておいたのもはや十八年の昔である。木村氏よ、私たちのために南嶋シチリアのお土產話を面白く聞かせて下さい。私たちはくれぐれも氏の健康と健筆とを祈つて止まない。

（「時事新報」昭和六年七月十三日）

東西喫煙史

越後の曾我重郎君、極東遠西の文獻を涉獵して東西喫煙史を稿し其の序を予に求めらる。顧みれば、予壯年のころは愛烟の癖なきにあらざりしかど、既に之を廢して二十年にもなりなんとし、今や却て烟を厭ふこと甚しきものあり。卽ち曾我氏の新著に序せんとする資格を有せざるに似たり。

然りといへども、廢烟の後に至りて、予が史癖は、予を驅りて、煙草の渡來蔓延の迹を考へしめ、煙管の異稱と語原を究めしめたり。予の愛書癖は、予を促がして、本邦の煙草に關する古書を蒐集せしめ、時には之を飜刻せしめ、或は又我國古今の煙草典籍の書誌を編せしめたり。予の詮索癖は、予を進めて、近世俳諧に見えたる煙草の類句を抄出せしめたり。これらの蒐集と著錄と、共に固より多きを以て大いに誇り詳なるを以て自ら任ずるにはあらざれども、亦予が一種異國情味の流露せるものに外ならざれば、予

が爰に趣味を同じうする所の曾我氏の書に題せんとする、不可なきが如し。

惟ふに、南蠻船來航數十年の後、煙草の輸入あり、喫煙の俗速かに流行して禁制の法度も及ばざりし徑路は、日本近世風俗史上に顯著なりしところ、之を同代の宗教史上に於ける吉利支丹の興廢に對比して、其の事蹟相似たるものありといふべし。異端を攻むるが如きの害なかりしとは言へ、其の徑路と其の事蹟とを考察し、進んで東西喫烟の沿革を精到に探究するは、文化史上閑却すべきにあらざること、蓋し論なかるべく、曾我氏が彼我の雜書を博搜して考證を企て、以て本邦の讀書界に寄與し聊か同好者の攻究に資せらるんとするは、眞に嘉尙すべき事なりとす。予も亦好尙を同じうするの士を得たるを悅び、且つ予が煙草書誌に在りても新に一良著を錄し得たるを幸とすること大なり。是に於てか贅言を題することしかり。

昭和八年三月七日　（曾我重郎著「東西喫煙史」序）

日本近世英學史

今夏東北帝國大學の司書官に榮任された重久篤太郎氏が、この十有餘年の間、京都に於て鋭意研學の中、專ら意を致されたのは、近世殊に明治初期における歐米諸國からの學術上乃至文化上の影響に關してであつた。著者重久氏は文獻を驅使し遺老に傾聽し、博搜深到、幾多の業績を發表して、最近世の日本學術史を資益されたことが多大であつた。氏は夙に九州帝國大學の豐田博士の提撕と軌範とを承けて、就中本邦の英學史の研鑽に寄與することが尠少でなかつたことは、人々の認識するところであつたが、曾て明治の學術史に對する西洋人の貢獻についての概要を帝國學士院の總會に於て披瀝したとき、數多の老科學者からの敎示と補益とを蒙り、今は故人たる長與男爵の如きは、親しく講演者重久氏を自邸に招致して、種々懇示し且つ新資料を提供されたやうな事もあつた。同氏は奮勵更に努力を加へて愈々この方面の研究に邁進されたのであつたが、今度

こゝに著者がそれら長年にわたる幾多成果の粹を拔いてその處女作單行本とされることを聞いては、それらの經過を知悉せる私としては、喜悅の狀亦一しほである。その苦辛の迹を回顧してみると、私の思出草として書き綴りたい事どもが夥しく胸中に往來するのである。

翻つて明治二十年のころ私がまだ十二歳のとき、英語を學びはじめ、またそれより少しまへに、鹿鳴館につれてゆかれて活人畫のやうなものを見せられたりしたこともあつた歐化主義全盛の時代から、半世紀以上におよぶ英米學の勢力の隆替を追想し來り、大正十一年の晩春のころ、英國皇太子に我國における日英關係史料を展覽して台覽に供し、その書誌を草したりしたときの印象を喚起したりすると、本書の著者からも發行者からも與へられた過分の好意に甘えて、異常に長い述懷記が書けさうにも思へたのであつた。今昔の感とか感慨無量とかいふ常套文句では到底言ひつくせない情緒がそれからそれへとたぐり出されて、實にとめどがない。然し今更かゝる時勢に方つてかゝる感想を錄するのも迂濶極まる話であるから、單に著者のために無限の悅びを表するだけにとどめるのであるが、ともかくも私は本書が普く日本近世學術史の考察者と、特に現代の英語學者とに對して、無二の基礎知識を與へ絕好の典據資源を供すべきことを信じて疑はない。本書はひとり過去の文化史料の一部を成すものとして有用なるのみならず、今日の時勢に卽して考へて見ても、又將來の趨向を達觀して見ても、彼を知り己れを知りて百戰百勝の基を造る上に於て、本書の如きは、いはゆる大乘的撰述と稱して決して不可なしと思ふのである。

（昭和十六年九月京都小山居に於て）

イソップ

「もしもし龜よ龜さんよ、世界のうちでおまへほど、歩みののろいものはない、どうしてそんなにのろいのか。」この童謡は今日では人口に膾炙し、スローモーションを嘲笑するやうな、讃美するやうな、なほ又かくいふ私をも責めるやうな、語氣を含んでゐるが、この話が初めて日本に傳はつたのは、或はむしろ日本に廣まつたと云ふ方がよからうが、それは、明治の初年に幕臣渡部溫が譯述した伊蘇普物語卷一の第二七話、兎と龜の話からである。この話は文祿の天草吉利支丹版の本にもなく、慶長元和の京都の町版本にも載せられてなかつたのである。漢譯の意拾喩言は幕末にあつて開國初期に漢學者に愛讀されたけれども、伊蘇普物語ほどには流布しなかつた。爾來イソップ物語の刊行は汗牛充棟の感あり、昨今ますます樣々の形を以て出版され、年々五種十種をかぞへられる有樣である。從つて個々の話が民俗の間に入り込んで舊來の說話固有の童話と錯綜して津

津浦々山間の僻地にまで行きわたつてしまつたのは自然の成行である。例へば、前掲の兎と龜の話にしても、昨年鄕土研究社から出た信州の小縣郡民譚集に里老から聞いた話としても鳩と蟻の話にしても、近年の讀物からしくなく、右の民譚集によると村人の口々に傳誦されるやうになつてゐる。この鳩と蟻の話は、私が一友から數年前に聞いた所でも、大和の山間から、又佐渡の島人から、純朴な物語として耳にし得るやうである。

昭和このかたにしても、土岐善麿氏の同二年における町のイソップ三話と同三年における驛のイソップ一話との如きものがあり、本年六月には昭和イソップと題した訓言をも見かけたやうに、全く在來のイソップ譬喩談から脫した新型の內容をもつ同じ題目の話があらはれて來た。かほどまでに普及し果てたイソップの勢力といふものは實に大したものである。猫の首に鈴をつけようとする鼠の話でも、ライオンの分け前の話でも、東西いつでも引用されて永久に活きてゐる話が多い。猫の首に鈴の話は、よほど古く當の伊曾保物語から他の敎訓本に取り入れられて、寛文二年（一六六二）の爲愚癡物語の

イソップ

巻五の第一にあらはれ、下つては天保の末年（一八四四）に爲永春水の繪入教訓近道にも收められた。必ずしも明治以降の傳來とは限らないくらゐに、民心に深く浸染してゐる。

されば兒童の讀物としてのみならず大人の自省訓誡として不朽な價値をもつイソップ物語の源流を探究する業は、日本に於てもすでに二三の學徒の試みたところであり、好事家好書家の展觀となり蒐集となり書志ともなつたことは、斯道の人々の知るが如くである。然し何といつても、研究では、故人上田敏氏が明治四十三年十一月に京都の史學研究會で發表した伊曾保物語考に越した業績はないといつてよい。この講演は、明治四十五年四月刊行の史學研究會講演集にあらはれ、當時その拔刷も數十部流布したが、今は昭和四年發行の上田敏全集第六卷に同類の論文と共に收められ、何人もこの方面の研究に進まんとする場合には必須の文獻となつてゐる。上田氏の考證の骨子は、主としてはジェイコブス（J. Jacobs）のイソップ喩談研究二卷に負ふ所が多いのである。物語集の傳統と個々の說話の系統とを兩ながら考究したジェイコブスの書は一八八九年（明

治二十二年）の著で、今日なほ信憑を保つてゐるが、明治三十五年（一九〇二）この本を得て以來、上田氏はかなり伊曾保源流考に傾倒してゐた。かくて十年後に著はしたのが、右の論考であつたが、同氏の學究的業績としては、よしや祖述的な點が多いとしても、全集中には最も光つてゐるものである。個々の話の傳來としては、私も文祿本中の、百姓と兒どもの事と題する說話が、こゝでは樹の細枝をたばねて農夫がその子供達を戒めたことになつてゐるが、私たちが幼時聞いたのでは毛利元就が臨終迫つてのをりに箭を束ねて兒等を訓誡したといふ話に似てゐることを指摘して、元就の遺訓は口傳としてよりも寧ろ書物の上から傳はつたものらしいことを注意したことがある。この事は天草本伊曾保物語の附錄三三頁乃至三七頁に述べておいたから詳かには再說しない。ともかくもイソップの個々の說話は、まだまだ東洋學者のがはから、殊に日本の文獻學者の方から、寄與すべき部分の甚だ多いことを感ずる。

イソップ

所謂イソップ物語の說話は、古來その數甚だまちまちであつて、歐洲所傳の古寫本の僅かに十數話にしか上らぬ斷片集は姑く別として、少くして數十話より百話內外に達し、

イソップ

進んで二三百話にも及ぶ集がある。時に三百以上の本もある。フェードルス(Phaedrus)の紀元第一世紀における集成本は約二百話を收めてゐるが、それは最初のイソップ說話集成の直系ともいふべく、後世それが所謂イソップ物語の中に織り込まれたり或は又分離して別本として著はれたりしてゐるが、紀元三世紀におけるバブリウス(Babrius)の集は約三百話と云はれてゐる。試みに近世日本の所傳について算すれば、文祿本は七十、慶元本は六十四、明治初年の渡部譯本は一躍して二百三十七といふ多數に上る。明治末期に至つては大きなものは百數十話より二三百話に及び、最も多きものになると、雨谷一榮庵のが三百十三話を算する程である。楠山正雄氏の大正五年刊本は、當代の日本で最も完備したイソップ本と稱せられるが、三三三話の多數を收容してある。この模範家庭文庫本に對して大正期の末に出たのは、世界童話大系本の伊蘇普寓話集であるが、それは山崎光子氏の譯にかゝり三百十一話を收め、別にローマ時代系統のフェードルス寓話集三十六話を錄してある。その外にはロシアのクルイロフ寓話集二百話が附いてゐる。

かやうな二三百にも達するほどの寓話がすべて古代希臘のイソップの述作であつたのかと云ふに、決してさうではない。これは苟も文獻の學問をする者の直に考へ當るべき所である。いづれの話がイソップの述作にかゝるものか、いづれの話が後世の附加增補であるか、それを一々區別するのは、或る程度まで出來ることであるが、徹底を期することは至難である。西洋の學者がそれを試み、日本の學徒がそれを紹述したことは前記の如くである。時代の上から考へて、西曆紀元前五六百年の交に生存して恰も曾呂利が近代に英傑貴人賢者の間にあゝいふ寓言めいたものを說法して大に當てたやうに、希臘の權門勢家哲人の間に出入して、單刀直入、峻烈な諷刺を動物などの寓話で彼等に浴びせかけた伊曾保は、むろん前代および當代の說話を祖述したり、自身が說話を創作また改作したり、述と作との二方面にわたつて當代と後世とに幾多の說話をおのづから語り傳へさせた。彼れ自身が說話の結集をした形蹟は毫もなかつたことは、故さらにことわる必要もないし、また弟子だとか亞流だとかの輩が、同時代もしくはイソップの死後直にそれらの說話を輯錄したと云ふことは認められなかつた。從つて後世イソップの說話

イソップ

イソップ

と稱せられるものは、その全部が全部イソップの述作若しくはイソップ時代の傳話だと考へることは出來ぬのは勿論である。かなり多數の說話がイソップの名を冒してゐるのである。イソップの盛名に假託されてをるのである。この種假託のことは東西その揆を一にしてゐる所で今さら怪しむを要しない。これこそ確にイソップの述作と認むべきだと認められる說話は極少いけれども、これらは決してイソップの述作ではありえないと斷定される說話もさう澤山に存すべきでない。要するにイソップの口を經て傳はつた說話と、さうでない說話とを今さら一々識別し得るものではない。從つて學者は用心して言ふときには、イソップ的寓話とかイソップ式喩談とか云ふ稱呼をつかふ。上田敏氏は、伊曾保ぶりの喩談といふやうな文句を用ゐた。

古文獻に著錄してゐる所では、イソップの名を附けて譬喩談の結集をした最初のものは、西曆紀元前三百年ころの政治家デメトリオス・ファレロス (Demetrios Phaleros) の結集で、ギリシア名で、イソップ流說話集成とも譯すべきロゴーン・アイソーペイオーン・スュナゴーガイといふ名で傳へられてゐるが、その全部なり一部なりが傳存して

ゐないのは惜むべきである。この人は前三四五年のころアッチカ州のファレロンに生れ、アリストテレス門下の著名な逍遙學徒たる哲學者テオフラストスに學び、辯說にもすぐれたアテナイの政治家であつた。後には海彼の新興都市アレキサンドリアの大圖書館の建設にも關係し一頃はプトレマイオス王家から寵遇もされたが、後には斥けられて前二八三年に其地に終つた。辯家たる閱歷から推して、イソップ物語の集成に努力しさうな人に見えるが、惜しい哉、その書が散逸して後世に傳はらない。然しデメトリオス後三百年を經て、イソップ式の喩談を編輯したフェードルスといふ希臘系の羅馬人の寓話家があらはれて、今も傳はれる有名な寓話集を編した。この人はマケドニア生れの希臘人であつたが幼少のをりから伊太利に住んでゐた。元はイソップと同樣な奴隸の身であつたのが、アウグスツス大帝から解放されて自由民となつた。その頃行はれてゐた寓話を蒐集して寓話集を編輯したのであつたが、當時イソップの名でもてはやされ說話を集めたのだといふからは、上記のデメトリオスの結集本は書物の形としては早く散逸し個々の寓言の姿で羅馬あたりの人口に膾炙してゐたものだらうと思はれるから、その口傳の

イソップ

イソップ

説話を集録したものと考へるのが至當であらう。フェードルスの書は、その内容二百有餘年後に現はれた羅馬の寓話家パブリウスの本に若かずといはれるけれども、第十七世紀に於てフランスの有名なラ・フォンテーヌの如き文豪に對して範を示したやうな點に於て世界寓言史上に一大功績を遺したものといはねばならぬ。このパブリウスは寓話家にして名家の師傅であつたが、紀元第三世紀の初に希臘の韻文を以て約三百篇のイソップ式寓言を編した。これも傳存してゐるが、やはりこの編著のうちにもデメトリオスの結集から多分に採られてゐるらしい。この系統の本が次世紀のアヰアヌス（Avianus）の拉丁抄譯であつて、これも亦現存するが、話の數は四十二にすぎない。下つて第十四世紀のマキシモス・プラヌーデス(Maximus Planudes)が作つたイソップ傳の如きも、そのパブリウスの所傳に脈絡を引いてをるのである。すなはち文祿のむかし天草の吉利支丹學林で出版した本にも、慶長元和年間に京都の町版にあらはれた本にも、共にそのイソップ傳がある。またラ・フォンテーヌが修綴し日本にも前後二三度譯出されたこともあつたイソップ傳が卽ちそれである。

イソップ

フェードルスの二百寓言集は、その後一千年近くも長い年月を經てから九世紀か十世紀のころに八十三話ほどに抄出されてロムルス傳本となり、その末流はパブリウス傳本の末流と合流して、諸傳諸流を集めて中世を經て近世のイソップ物語となつて廣く流布するやうになつたのである。ジェイコブス乃至柳村の考證とイソップ書譜とを見て、源流の詳細を知ることが出來る。ともかくも近世初期に至つて、卽ち委しく言ふと一四〇〇年代の後半期むしろ末期に方つて、新興の活字印刷術によつて、この古典的寓言集が、西及南歐洲大陸および英國に於て印刷せられて、普及するやうになつた。殊に英國にあつては、一四八四年すなはち我が文明十六年に有名なカックストン版のイソップがあらはれた。これは所謂インクナブラ版の錚々たるもので、私もすでに何回か援引し又寫眞に撮つて度々示したことのある稀覯本である。ジェイコブスがイソップ研究第二卷に複模解說したものがそれである。十五世紀版あるひは初期活版本とも註せられてゐる搖籃期版本のイソップ物語は、一四七三年以降の二十八年間に、凡そ百五十一部出てゐる。今日の調査では更に增加してゐる樣である。尤も國名はわかつても年代と土地との不明

イソップ

な本もその數字中に含まれてゐるが、その時代に相當してはかなり多數に上つてゐると云つてよい。ラテン文のが最も多くて六十五種を算し、イタリア文ラテン文二體のが十八種に上り、ドイツ文のが十四、フランス文のが九、イギリス文のがカックストン版とも二種、オランダ文のが同じく二つ、イスパニア文が三つ、その他訓戒文附きのが二十九部、出版地ではイタリアが自然最も多數で、ドイツがそれに次ぎフランスやオランダがその次ぎになつてゐる。當時の印刷文明史上當然の順序である。かういふ風に、我が伊曾保物語は十五世紀以來非常な勢で歐洲諸國を風靡し、カックストン版以後百年あまり經て、天草版を日本から出したやうな有樣である。日本の慶元版本よりは少し後れ、その系統本の寛永版のあらはれるより十數年まへに、明末の支那でやつと漢文譯本が在留西洋宣教師によつて著はされたが、それは未刊のまゝで巴里の國立圖書館に存するだけである。新代になつてからはこれも英人によつて譯刊された。十九世紀の中期である。

世界におけるイソップ物語版本の大體を覗ふには、近年續刊されつゝある大英博物館所藏の版本目錄のイソップ物語の部を檢して見るのが一ばん早い。をかしいのは、その

目錄中に、文祿本の名を錄してないことである。その文祿本こそは世界唯一の貴重本であつて、同館のイソップ文庫のうちでも、カックストン版と同等もしくは以上に光輝を放つてゐるものを、それを印刷目錄に著錄しないのは、これこそ眞に燈臺下暗しのそしりを免れない。一昨年在英中老司書の一人に注告してはおいたが、ともかくも我々は殘念でたまらなかつた。

かくの如く世界に弘布して極まりなきイソップ物語の創作者ともいふべきイソップ其人は、如何なる人ぞ。

希臘語で正しくはアイソポスと呼ばれる其人は、紀元前六二〇頃に生れて五六〇頃に死んだ人と云はれてゐるが、正確な年代はわからない。歿年を五六四年だとする學者もあるが、その傳記の詳細は固より知られない。右の如き普通の說によると、六十歲ばかりで命を終つたといふことになり、孔子よりも釋迦よりも古い賢者だといふことになる。卽ち孔子よりは凡そ七十年古く生れて八十年も早く死んだ筈になる。釋迦が生れる前に伊曾保は既に命を終つたと見られよう。日本書紀の紀年で計算すると、イソップ

イソップ

イソップは神武天皇在位の中頃に生れて綏靖天皇在位の中程に死んだのだと見ることが出來るであらう。イソップはさういふ太古の人であつた。ホメロス時代よりは四百年後、ソクラテス時代よりは百五十年くらゐ昔の人、正に希臘七賢人の時代と同年代に生存したのだと云はれる。假に莊子をイソップとは全く違つた意味での寓言家としても、それを紀元前第四世紀の人とすると、イソップの方が二世紀も以前の寓言家だといふことになる。印度の本生經(ジャータカ)などは、紀元前第五世紀の編輯であるから、それよりも一世紀ほど昔の人だといふわけである。イソップの古さかけんが、これらの對照によつて良くわかるであらう。

アイソポスよりも更に二世紀古い紀元前第八世紀の敍事詩人ヘシオドスの作のうちには、後世のイソップ物語に編入されてゐる夜啼鶯(よなきうぐひす)すなはちナイチンゲール(希臘語のフィロメーラ)の話が出てゐる。アイソポスより正に百年前ころに死んだ抒情詩人アルキロコス(Archilochos)の詩の中にもイソップ話しが二つほど出てゐる。但し二家の作品にアイソポスの名を以てそれらの喩談が書いてあるのではない。後世のイソップ式說

話のうちのものが、アイソポス以前の作詩中に散見してゐるといふだけである。その他、アイソポスと同時代又は稍年長者であつた作者の詩のうちにもイソップ式喩談があちこち見える。さればそれらと同一の喩談をそれらの作家より後代または同代のアイソポスが演述したといふ記載が殘つてゐないにしても、紀元前六百年頃に名高かつた寓言家たりし彼が述作したと云ふことに推定されたり假託されたりしても仕方がないのである。

イソップ流の喩談は、アイソポス歿後數十年にして、前五世紀乃至前四世紀の希臘詩文にはかなり多く散見して來るのである。それのみならずアイソポスの名も其の前第五世紀の史籍などに見え初め、次なる前第四世紀の經籍にはいよいよ顯はれて來た。その上にその前四世紀後半期には誰も知る彫刻の大家リュシッポスの手でアイソポスの彫像か鑄像かが作られたやうな事實がある。かくて其の世紀の末か次なる第三世紀の初か、まづ凡そ紀元前三〇〇年頃にあたるであらうが、前述の政治家能辯家たるデメトリオスが、アイソポス說話集成を編輯するに至つたのである。その書は後世に傳存しなかつたが、ともかくもアイソポスの死後約二百五十年にして、さういふ結集が行はれたといふ

ことになるのである。從つてそれら紀元前第五世紀第四世紀の二百年間の希臘古典文學の盛期における詩文の研究が、更に三百年を隔つる所の紀元第一世紀の拉丁古典文學盛期に編まれたフェードルスのイソップ流説話集の實質的研究と相對して、最も重要になるわけである。このフェードルスの説話集の成つたのと同世紀で、恐くは少くとも數十年を下るかと思はれる頃に、彼の著名な希臘文士プルタルコスが七賢人物語を書いたが、その中にアイソポスの名前や事柄や寓話がちらほら見はれてゐるのである。

先づ紀元前第五世紀すなはちアイソポスの逝いてから數十年後に始まる次世紀に當るが、この世紀は印度では恰もヂャータカすなはち本生經の時代でありほゞ大聖釋迦の時代に概當する。希臘本土では悲劇家のアイスキュロス（五二五—四五六）やソフォクレス（四九六—四〇五）、さては喜劇家のアリストファネス（四四五—三八五）等の輩出を見た時代である。これら諸大家の作品中にイソップ式説話が散見してゐることは、ジェイコブス等も指摘した。この世紀の歴史家ヘロドトス（四八四—四二四）は、その史籍において初めてアイソポスの名とその事蹟の片鱗とを描出した。

ヘロドトスの史籍第二卷第百三十四章に、埃及のピラミッド建立の事を敍して、建立者に擬せられた内侍ロドーピスなる者の出身がトラキア生れの奴隷たることを述べた條に、この賤の女上りの内侍も、元を洗ふとアイソポスと同じく共にサモスの豪家イアドモンの奴婢であつたことを記るしてある。アイソポスが説話の作者（ロゴポイオス）であつたこと、イアドモンの隷屬たりしこと、その證據としては、名高いデルフォイの託宣によつてアイソポスを死刑に處することになつた所が、誰一人として手を下さうとする者もなかつた際、前主人の孫にあたるイアドモン某が進んで處刑を敢てしたといふ事實、これらの斷片的な事どもをヘロドトスは擧げた。次章一三五章は、彼の賤の女ロドーピスがサモスのクサンテス（天草本にはシヤント）によつて埃及に廻された後、都合よくも解放されて出世したといふ始末が記るしてあるが、アイソポスには關係がないから玆には省かう。

ヘロドトスの死後二十五年程經つてから刑死した大賢ソクラテス（四七〇—三九九）は、獄中に於ける最期のをりに、アイソポスの寓言について述べたことがある。それは

プラトン（四二九—三四一）の名著パイドンに記るされてゐる。本書は既に菊池慧一郎氏が希臘原文より譯出して廣まつてゐるし、又ソクラテス刑死の顚末は久保勉氏の譯書もあつて讀書界に知られてゐる。本書をよむと一篇の劇に接したやうな感じがするが、パイドンが獄中のソクラテスに逢ひに往つた話をする條の如きは、息づまるばかりのシーンである。細君のクサンチッペをクリトンに連れ歸らしめた後、ソクラテスは從容として語る。今菊池氏の譯文を引かう。

人々が「快」と呼ぶものは實に不思議なものであると思ふ、其反對である「不快」と妙な關係にある。此兩者はなるほど同時には同じ者に來ることを欲しないが、何人にもあれ一を追ひて之を得る場合には、殆ど必ず他をも得なければならないやうになつてゐる、まるで二つでありながら、一つ端に結ばれてあるやうだ。そこで僕は考へるに、もしアイソポスにして之を意識したならば、一の物語を編んだであらうと思ふ、「謂はば神が彼等の爭鬪してゐるのを和解せしめようと思つたが、できない。そこで兩者の頭を一つに結びつけてしまつた、其故に或人に一が來れば、其人

には後にはまた他もついて來る」と。現に僕自身にとつても全く其通りのやうである、つまり鎖によつて脚に苦痛を覺えてゐたが、今は明かに「快」がついて來たのであるから。

「樂あれば苦ある」ともいひ、「禍福は糾へる繩の如し」などといふ意味の寓言は東西いくらもありさうで、あゝいふ刹那にすらソクラテスはアイソポスの說話を想起するらゐであるから、アイソポス死後百五十年程の國都には、その寓言家がいかに人口に膾炙してゐたかがわかるであらう。次にはパイドンと同門のケベスがパイドンの右の言葉を受けて物語をつゞける。「ソクラテス先生、あなたのお話で丁度よく思ひ出しましたが、あなたのお作りになつたアイソポスの物語の詩について皆々から尋ねられましたが、以前には詩をお作りにならなかつた先生が、どうして此所へおいでになつてからお作りになるのでせうと更まつて尋ねられでもしましたら、何と返答をしてやつたものでせう」と物語りながら、ソクラテスの文藝論の一くさりを紹介した後に、次のやうな、アイソポスの寓言を詩に作つたといふソクラテスの述懷を談つた。夫子の語に云く、

さて考へて見るに、苟且にも詩人であらうとするならば、詩人と云ふものは、理實（ロゴス）にはあらずして、物語（ミュトス）を詩に作らねばならぬものである、ところが自分は物語（ミュトス）の才に缺けてゐる、そこで僕がよく知りぬいてゐるアイソポスの物語を手當次第にとつて、それを詩に作つたのである。

以上パイドンとケベスとの兩人によつて紹介されたソクラテスの獄中語の二三節に由つてみると、アイソポスの寓言が、夙にソクラテスの如き哲人の口によつて韻文化されたことがわかる。蓋し寓話の詩形化はこの大哲人のみに限つたわけではない筈である。而して後世希臘拉丁の韻文譯が出來、續々拉丁韻文譯のほか近代歐語譯などが現はれるやうになつた。

プラトンのクラテュロス（四一一節）には、獅子の皮を着た驢馬の話（ヂャータカにもある）が出てゐるが、右のパイドンの話の中には、アイソポスの寓話は、具體的には引用してなく、單に寓話の韻語化に關する點だけが扱はれてゐるのである。從つてアイソポス自身が語つた寓言として確かに傳はつてゐる說話といふと、いくばくもないといふことにならう。そこで彼を烏有の人だなどといふ極端な論も起つたことがあるが、ヘロドトスやプラトンによつて、（よしそれらの文獻が稍後世のものであつても）、實存した人たることは抹殺出來ないのである。

次に、アリストテレス（三八四—三二二）の修辭法（レトリカ）第二卷第二十章にも、アイソポスが奴隷から解放された話がみえ、そこには彼の寓話として狐と猟の話が引かれ、また前代のステシコロスの馬と鹿の話なども錄されてゐる。これらの說話の引用と說話者たるアイソポスの名とが歴然記るされてゐるのを見て、前掲諸書の記るす所を確實にすることが出來る。アリストテレスよりの資料に就いては、後日別に詳說しようと思ふ。

プルタルコス（紀元後四六—一二五）の訓言 Moralia にもアイソポスの事と寓言とが散見する。アイソポス歿後六百有餘年後の記事ではあり、全然信據とすべきではないけれども、又一概に排斥すべき文獻ではないと思ふ。浩瀚なる英雄傳の方は、日本にも愛讀せられ現に全部の飜譯も進みつゝある樣であるが、他方モラリアの方はそれほど世

イに顧みられずにゐる。たゞ同書中の七賢人物語は往々問題にされる。その物語（原名トソーン・ヘプタ・ソフォーン・スュンポジオン、拉丁名セプテム・サピエンチウム・コンッギギウム）をみると、タレス、ソロンなどの七賢の饗宴の席へ、アイソポスがソロンプの次席の低い椅子に就き、まづ騾馬と驢馬の寓話をしたことを始め、その他笛作りの話などをしたことが出てゐる。クロイソスに送られて來會したことや、デルフォイ刑死の件なども錄されてをり、參考すべき資料に富んでゐる。

以上の比較的正確な資料をも參照したのかも知れぬが、それよりもむしろ上世中世の俗傳に據つて組立てたのが、ビザンチンの學僧マキシモス・プラヌーデスのイソップ傳である。プラヌーデス（Maximus Planudes 一二六〇頃—一三一〇頃）のことは、クルムバッヘルのビザンツ文學史に出てゐるが、拙著文祿舊譯伊曾保物語およびその再版增修本たる天草本伊曾保物語に略述しておいた。ニコメヂア生れで伊太利にも學び、十三四世紀の交にあつては功績のあつた文獻學者であつた。敎化に資するために俚諺を集めたやうなこともあつた程であるから、敎訓用としてイソップ物語を修すると共に、古

傳に基いてイソップ傳を新作したのであらう。天草本の首めに、「イソポが生涯（しやうがい）の物語略（ものがたりりやく）」と題して、「これをマシモ・プラヌーデといふ人、グレゴの言葉よりラチンに飜譯せられしもの也」と註し、先づそれがローマ字綴りで吉利支丹の徒に傳へられた。慶元版以下いくたびか新版され、また繪卷物にもなつた所の平假名交り本にも、卷頭必ずこのイソップ傳が附いてゐる。明治初年の渡部溫の譯本には、トーマス・ジェイムスの原本に缺けてゐるまゝに之を附存せぬが、同三十二年に至つて堀三友といふ人がラ・フォンテーヌの文章から譯出して伊蘇普實傳の名を以て新代日本の讀者界にひろめられた。近ごろでは楠山氏の新刊本たる春陽堂少年文庫（第十八篇、昭和八年正月）にも、改修された姿で附錄されてゐる。實傳と銘打つてあるが、決して正傳ではない作り物語にすぎないのである。然しサモス島の奴隸生活より身を起し、諸邦を遍歷し、末にはデルフォイで刑戮に遭うたことだけは、事實とみとめてよいと思ふ。その他七賢人の饗宴に列したといふ話などは、プルタークの所記そのまゝを信じて間違ひないかどうか、頗る疑問である。要するに、アイソポスの傳記の正確なもの精密なものは到底わかるものではない。

自分が先進の研究の手引によつて聊か手を着けた所でも、甚だ茫漠たる事ほか分明にし難いといふ結果を得たにとゞまるのである。

餘談として二三の蛇足を加へたい。先づアイソポスの名前であるが、語原的には、フリギア又はミュシアの稱呼らしいと云ふことである。小亞細亞のそれらの地方の河川の名また河川の神祇の名にアイセーポスといふのがある。アイソポスの稱は、それと關連してゐるといふ一說がある。他方にはアイチオプスといふ名から出たのだといふ說も出てゐる。エチオピア人だと考へたのである。アイソポスが東方人であるらしいといふ見地から牽强したものであらう。別に上田氏が引合ひに出したアイソクロス（醜）オープス（面）といふ語原說の如きは、イソップ俗傳に面相の醜いとしてあるのからの着想にすぎない。西洋にも日本の國學者に見るやうな語原說もあるのである。異相坊だといふ上田氏の皮肉な評もあつた。イソップが醜い容姿をしてゐたといふ俗說は、プラヌーデスの作つたイソップ傳に見えて、近代のイソップ物語の口繪や挿畫によくイソップを醜惡にゑがいてあるけれども、リュシッポス（前三六〇年生）の作つた鑄像の如きも決し

て醜く作つてなく立派に仕上げてあると云ふことである。近世の畫であるが、ヴェラスケスの畫いて西班牙國都の畫堂に懸けてある全身像にしても、特に異樣醜惡にゑがいてはない。尤も後世の作品は、事實の反映とするには足らないことは申すまでもない。要するにイソップは、フリギアあたりの東方人であつたとすると、ともかくもヘラス人から見ると、異民族であるので、それが異樣な姿態をしてゐると誇張されて傳はつたものに違ひなく、果ては天草本などで知られた樣なさも醜惡な面相と姿勢をした男と誤解されてしまつたのであらう。

イソップの事および希臘の寓言（フェーブル）のことは、Pauly-Wissowa の古代學百科事彙の Fabel の條下に、簡便な見易い形に於て要領をつくしてある。イソップ其人についても、名前や鄉里や年代や傳說やイソップ小說などから肖像や人物評に至るまで周到な扱ひをしてある。またイソップ以外の古代希臘の說話家やイソップ式寓話についても本書は參考になることが多い。

自分のイソップ研究そのこと、殊に本講座におけるイソップ其人に關し、イソップ物

語其本の系統に關して、述べ來つたことは、若しイソップ其人に出會つたら何と云はれるであらうか、自ら省みて慚愧の念に堪へない。而も不健康のためとは云ひながら斯くも非常に執筆がおくれたことについては、イソップの寓言をまつまでもなく、讀者に對して、編者に對して、發行者に對して、大に恐縮してゐる次第である。

（備　考）

所謂イソップ物語の說話の數について、言及したから、補つておくが、萊府トイブネル版、イソップ式物語集成（アイソーペイオーン・ミュトーン・スュナゴーガイ　卽ちファブラエ・アエソピカエ・コルレクタエ云々）はハルム Halm（一八五二年自序）の編刊によるが、四二六話を收む、然るに一六九四年刊、サー・ローヂャー・レストレインヂ Sir Roger l'Estrange の編刊本には、五百有餘を算せられ、英文の諸本を算へ合はせると、七百種にも上るさうだ。かやうに上田氏は報じたが、元元眞のイソップ喩談の數はわかるわけはない、比較的少數と見究めなければならないと思ふのである。

（昭和九年六月刊岩波講座「世界文學」）

イソップ物語

古代ギリシヤの說話家イソップその人が語り始め語り傳へた譬喩談と後世イソップの傳承に由ると假託された譬喩談との合流したものが、世にイソップ物語として知られてゐる。詳かに云ふなら、一括してイソップ式物語といふべきであらう。

ギリシヤ語ではアイソポス Aisôpos といはれるこの賢者は、非常に太古の人であつて、ギリシヤ七賢人の時代、卽ち孔子よりも釋迦よりも其國の大哲ソクラテスよりも少し古く、支那古代の寓言家莊子よりは二世紀も古く、日本では書紀の紀年に由る神武天皇の御代に當る時代に生存した人である。イソップの身分は、もと下賤な出であつて奴隷上りだといはれてゐる。併し智慧はすぐれ辯說には長じ頓智に富んだ當代切つての才物であつて、好んで修身齊家治國に關して得意の譬喩談を試みて世俗を諭し、權門に請ぜられ民衆に招かれて獨得の鋭鋒を以て寓言を語り、人々を警醒した。身分も身分であ

つたから、人意に投じもし、諷刺と興趣とを兼俱して、安易の裡に教訓の意を寓しつゝ、人を悅ばしめる點も多かつたやうに覩はれる。かくイソップは、能く人の感興をもそゝり人の心境にも當るやうな寓話を以て歡迎されたのであるが、往々犀利な舌鋒が權勢者や凡俗人の忌憚に觸れるやうなことも起り、遂にデルフィ市民の怒を招いて非命の死を遂げたと言ひ傳へられてゐる。イソップがギリシヤ本土や屬島のみならず東南に隣接する外地異域の諸方にも渡つて、寓話を說き巡つて持てはやされたといふ奇聞も、彼の傳記を飾つてゐるが、或はエジプトに或はバビロニヤにまで巡歷したといふやうな逸話は、一々信ずべき限りではない。併し彼の訓言の中に東方的な要素の少からず含まれてゐることは既に先覺者の指摘した所であるが、それら東方的要素は、イソップ時代に於てすら、口々相承によつて西漸したものがあらうと同時に、イソップ其人の東邦巡回によつても齎された幾分がある事を反映するものと看做されるであらう。

イソップの事が記載されてゐる正確な史料をギリシヤの古典に求めるならば、史籍ではヘロドトス Herodotos（前484頃—425頃）の『歷史』第二卷第百三十四章、經籍で

はプラトンの『パイドン』の首章、アリストテレスの『修辭法』第二卷第二十章、更に下つてはプルタルコスの『訓言』それらに現はれてゐるのが古い。

イソップ其人の寓言及びイソップ式譬喩談の一つ一つが、古代ギリシヤの古典中に散見してゐるのは、其の數は極く少い。イソップの名を冒した古代の譬喩談叢を結集した最初の人はイソップよりは三百年も後の人で、アテネの政治家デメトリオス・ファレロス Demetrios Phaleros であつた。紀元前三百年頃の人であつた。此人はイソップ式說話集成とでも譯題すべき一書を成したが、その書は後世に傳存しない。たゞ其後三百年を經て、ギリシヤ生れローマ在住のフェードルス Phaedrus といふ、これもイソップ同樣奴隸上りで、アウグスツス Augustus に釋放された者が寓話集を編輯した時には、蓋しこのデメトリオスの集成本も尙存してゐたに違ひない。少くともその集成本から出て人口に膾炙してゐた個々の寓言がフェードルスの本には多數編込まれたと見てよい。卽ち文獻なり口承なりから、フェードルスは現存の寓話集を編輯したものとすべきである。所收寓言の數は約二百話である。このフェードルスに對して、出藍の譽をもつもの

は、更に二百年餘りを經て現はれたローマのバブリウス Babrius の二三百篇の寓話集が、後世のイソップ物語の源泉をなすものであつて、ラテン語を經て近世ヨーロッパ諸國語に飜譯され、更に再三の譯を重ねて、印刷術の發達に伴つてヨーロッパ、アメリカ、アジアの諸國に普及して今日に至つた。ヨーロッパに活字印刷術が發明されて十有年後、一四六〇年代の初めから所謂イソップ物語は、ドイツを始めとして、オランダやイタリー、フランス、續いてイギリスにも印刷された。この十五世紀の下半世紀、細かく云へば約四十年間に約百七十八種の刊行を見たと報ぜられてゐる。それを書誌學では初期活字本（揺籃期活字本）と云つてゐるが、幼稚時代の產物としては夥しい數に上つてゐると云へよう。

この時代が終了後、百年近くも經過して、新興日本吉利支丹の宗門で、學林の讀本としてこのイソップ物語がラテン語の本から和譯され而も口語譯で印刷に附せられた。天草の學林に附設した活版所で刊行されたのが文祿二年の正月即ち西紀一五九三年二月のことであつた。禪僧惠春なるものの轉宗した巴鼻庵（ファビアンFabian）の譯出であら

うと考へられる。簡潔な桃山時代の標準口語の雅馴な譯文で、ローマ字つづりで出來てゐる。それから二三十年を經て慶長年間になつて、今度は別に通俗の文章語を以て『伊曾保物語』といふ題名を以て活版に附せられて三卷京都邊で刊行された。尋いでそれが元和・寛永の二三十年間に續刊されて、現存するものが凡そ七種ある。德川初期の教訓文學としては、相當弘く讀まれたらしく、少し形を變へて他の教訓本にも採り入れられてもゐる。この本が讀書界に愛誦されると共に、繪卷物に仕立てられたことがあり、又繪入本で萬治二年に木版本が出版されてゐる。これ等德川初期刊本は既に飜刻されたことも屢々であり、萬治版は全部複製されたりした。飜刻本には明治四十三年の『日本教育文庫教育篇』にも收められた程で、諸方面に珍重されてをる。天草本は余が飜字して再三出版し、これ亦國語學界の一新資料となつた。かく明治以後に至つてこの『伊曾保物語』が復興したことは言ふまでもないが、江戸中期以來長らく忘れられてゐた際に、天保の末年に、爲永春水が風俗紊亂から轉向する矢先に、『繪入教訓近道』と題する童蒙の讀物を著して、久し振りでこの教訓書から取材したやうな、見逃し難い事實もあつた。

蘭學時代に在つて、オランダ文のイソップ物語を傳へた證跡は確かに存したけれども、譯本としては一つも現はれず、全く舊吉利支丹系統の『伊曾保物語』のみが珍重されたのであつた。

漢譯のイソップ物語は、これも吉利支丹系統の譯本で明末の耶蘇會卽ち支那のエスイタ派の宣敎師の試譯本『況義』が未刊のまゝパリの國民圖書館に存してゐるが、日本には寛永年間に傳はつた形跡を認める。二百年後、淸朝の道光二十年、日本の天保十一年(1840)にイギリスのプロテスタント宣敎師が漢譯印行したことがあつた。この新漢譯本『意拾喩言』中の寓言が幕末になつて斷片的な形で日本に舶載されて一部の漢學生や愛國者に愛讀された。吉田松陰の如きもそれを人に緣つて長崎から得て、イソップの訓言を、時事問題に結びつけて警醒に資したやうなこともあつた。明治以後、この漢譯本の全部が傳はつたことは元より言ふまでもない。

維新以後、英文から飜譯して出版した第一の名著としては、德川藩の創立にかゝる沼津兵學校の敎授渡部溫の『通俗伊蘇普物語』六冊(明治五—八年)であつて、訓言の數

は二百三十七の多きに達してゐる。文祿の天草舊譯本は七十話、慶長・元和の新譯別本は六十四話、明朝末期の漢譯舊本は二十二話、淸朝晩期の漢譯新本は八十一話であるが、この明治初期のイギリス傳來の分は一躍斯くの如く多數に上つてゐる次第である。木版本で挿畫も數多ある。それ以來各種新譯本の外、幼少年の讀物繪本・英獨語學用本・飜刻本・複製本等を加へると、最近に至るまで、殆ど百種に達するほどの出版がある。其中明治四十年刊の上田萬年解說の『新譯伊蘇普物語』、大正五年刊の楠山正雄の『新譯イソップ物語』、大正十四年山崎光子譯の『伊蘇普寓話集』等が傑出してゐる。

イソップ物語が譬喩談として最も廣く讀まれて利用せられてゐることは周知の事實である。寓話文學の白眉たり敎訓文學の傑作たること何人も異論のないところである。合しては、十七世紀中にフランスに在つてラ・フォンテーヌ(J. de La Fontaine)の寓話詩の如き名著となり、散じては、西洋文學の中に金句となつて永しへに生命を有し、日常絕えず人心を警誡諷刺しつゝあることは、多說を要しない。日本の敎育家が、すでに早くそれを活用してゐたことは當然であつた。但し寓話の盡くが國柄により時勢により

年齢により肯綮に中つてゐるわけではなく、もとより取捨加減すべき點のあるのは、今更斷るにも及ぶまい。併し東西に通じ古今を貫いて不易の眞實がイソップの寓話に含まれてゐることは、永久にこの所謂イソップ物語の價値を至高ならしめ不朽ならしめる所以である。

（昭和十一年五月刊、岩波書店版「教育學辭典」第一卷）

天草本「伊曾保物語」

吉利支丹版文學書のうち、平家は原文の口語化に問答體を加味したものに過ぎず、太平記及び朗詠集は原典の再錄に過ぎぬに對し、伊曾保は一つの飜譯しかも最初の西洋文學の飜譯であるから、其の南蠻文學としての價値は前三書と比較ならぬほど高いと云はねばならぬ。天草本伊曾保に附ては古く明治二年七月九日の中外新聞に其紹介が現れてゐるが、サトウの書志に始めて纒つた解題があり、故上田氏も明治三十六年にはその講演「外國文學の研究」中に本書を紹介したり、明治四十三年十一月、精緻な「伊曾保物語考」（上田敏全集第六卷）を發表した他に、寛永和本系伊曾保の校勘本を出版せられんとした企てもあつた。私も明治四十三年其全文を翻字し翌年之に「西洋文學翻譯の嚆矢」といふ小論を附して刊行し、更に昭和三年十月には之を修訂し關係諸論考を新增して「文祿舊譯天草本伊曾保物語」と題して上梓した。同年七月には伊曾保展覽會を京都に催した

り、翌四年七月には天草本からの現代語譯をアルスの兒童文庫中の一冊に加へたりした他、其後も度々伊曾保雜稿を發表して新資料の採訪紹介を試み、同じ岩波講座の世界文學にも「イソップ」の一文章を草したりして、かの平家の喜一坊から、「さて〳〵きつい伊曾保上戸でござる」と笑はれ兼ねまいほどの愛著をもつてゐる。それらの詳細は私の諸稿に讓つて、こゝには本書の內容と其類本關係と我國文學に遺した痕蹟の一端を要約するに止どめる。

南蠻本伊曾保は、「イソポが生涯の物語略」四章と「イソポが作り物語の拔書」上下二卷「狼と羊の譬の事」以下七十話から成つてゐる。伊曾保傳には、「之をマシモ・プラヌーデといふ人、希臘より拉丁に翻譯せられしもの也」と附記してゐる。「平家」よりは一層くだけた京阪地方の談話體口語文を用ゐ、その話題の多趣、文辭の簡樸輕妙、之を口語文學、お伽文學、寓話敎訓文學として見るも優に我國近代文學中に傑出した作品たるを失はぬ。本書の語學的研究に附ては、春日政治氏の「國語史上の一劃期」（新潮社日本文學講座第十四卷第十八卷）や土井忠生氏の「天草本伊曾保物語と方言」（方言第四

卷一號）等に讓るが、用語は當代の京阪語に方言洋語をも混へ、語法は室町時代の口語體を傳へ、ローマ字式寫音法は當時の發音を審かにして、國語史資料としても價値は大きい。譯者は不明であるが、平家の口譯者ハビアンや、シュールハンマー氏のあげたヨーホー軒パウロ等が擬定せられ、又土井氏は天草本に九州方言の少くないことから推定して肥前生の邦人イルマン高井コスメの名をあげて居られる。「鹿と葡萄の事」といふ一話を引いておく。

ある鹿・獵人より俄かに追はるゝによつてせん方なさにそのあたりなる葡萄の蔓のうちへ身を隱いた。獵人その所を通れども、鹿を見つけいで行きすぎた。その鹿「あら、今は辛い命を助かつたものかな」と思うて首を差上げ、その葡萄の葉をくらうたが、その口音を獵人がきゝつけ怪しめて立返り、「さてはかの蔓の蔭に何ぞけだものの居るものよ」と見れば、右の鹿を見つけ、そのまゝ射て取るところに、鹿のいふは、「わが命を助けたこの蔓の葉をくうた罰に、この科にあふぞ」というて死んだ。

下心。恩を仇をもつて報ずれば、天罰のがれずといふ義ぢや。

イソップ物語の源流研究に附ては、我國側では「伊曾保物語考」は最も貴重な業績であるが、古代印度の動物譬喩談が、紀元前五世紀ごろ釋尊の教化に利用されて「本生經（ヂャータカ）」となり、これが西漸する途すがらには、アイソポス卽ちイソップの語原に關するともいふアイセポスなる水神の棲む小亞細亞の河を涉り、いつしか希臘の民間喩言と合して紀元前三世紀ごろには所謂イソップ譬喩集となり、口傳に寫本に刊本に、歐洲の諸國に普く擴がり、やがて近世に入ると、その中の一本が南蠻船に載せられて印度洋の煙波を東へ回り、遂に絕東の島の浦わに漂ひついた遍歷の途けさを偲ぶにつけても、是が教訓書であつたお蔭で嚴しい禁制の眼を逃れて、德川時代の國文學にその系統が傳へられたのみならず、大和信濃の山里や佐渡の離れ島に迄も民譚のかたちで殘されたらしい事は我が伊曾保のために此の上もない幸運であつた。

吉利支丹版ローマ字本伊曾保の外に、德川初期の漢字平假名本が殘つてゐて、いづれも同一系統の譯本であるが、印刷樣式の上からは、七種の異版をあげることが出來る。活字本六種と繪入整版本一種である。活字本には慶元頃と思はれる無刊記本五種と寛永

十六年刊本一種とあり、整版本は萬治二年版であるが、何れも稀覯に屬する。尙德川初期寫本としては、佐佐木信綱博士架藏の三種と、神宮文庫と鹿田松雲堂との藏本各一種合計五種が知られてゐる。

今此等の國字本とローマ字本とを比較すると、喩言の順序や數や文章の繁簡はもとより、其用語もローマ字は口語體を採り、國字本は文語體を用ゐて居る點から推察して、兩者は別系のものと見ることが出來る。然るにロドリゲースの日本文典に引用された伊曾保の辭句の中には、此等二系統以外の文語體のものを用ゐてゐる點があるから、既に文祿以前に文語文に譯された廣本とも云ふべきものが出來上つてゐて、それから一方天草版のローマ字口語本が作られ、他方國字文語本が作られたかも知れぬといふ假定を、私は嘗て「天草本伊曾保物語」の附錄中に試みて置いたが、此は興味ある研究題目だと思ふ。但、此等國字本のうち萬治版に大正十四年稀書複製會の模印本があり、文明源流叢書等にも複刻がある。

次に伊曾保物語の拔萃刊本では、元和頃の「戲言養氣集」中に「世を渡る肝要は眞僞

の間のもちる其所を得るに有」と題して、烏と狐の話が使はれてゐる。萬治版伊曾保から三年經て出版された寛文二年版の曾我自休著「爲愚痴物語」卷五には「鼠ども集り談合評議の事」が引かれ挿畫もある。天保十五年版爲永春水著「繪入教訓近道」といふ草双紙には伊曾保から十六話が藉られ、これにも歌川貞重の挿畫がある。尙古く水谷不倒氏がその著「列傳體小說史」(明治二十六年)中に、淺井了意の「浮世物語」(寛文十年)が伊曾保遍歷談に胚胎したらしいと推測せられたが、その當否は別として、了意は破邪書の編纂にも因緣あつた人だけに其の點この臆測は興味を引く。

イソップ物語が我國に入つた徑路は以上の南蠻系統の外に、漢譯本と英譯本を通じてである。私は嘗て和蘭系統の一流がありさうなものと疑つておいたが、その痕跡は司馬江漢の「春波樓筆記」(文化八年)中に暗示のある他、譯本は世に現はれなかつた。しかし昭和三年始めて見る機を得た金澤の前田直行男所藏の蘭文古版繪入伊曾保の斷簡六枚は私の推考を確める一の資料と見られる。此は譯本では無く、一六一七年(元和三年)アムステルダム刊「動物公苑」と題するイソップの影模であるが其原本たる「動物公苑」が

元祿以前から蘭人と交渉あつた前田侯宗家の手に入つたので無かつたかと想像されるのである。この斷簡についての考證は近著「典籍散語」に收めておいた。

漢譯本にも二種あつて、一は舊代南蠻系統のもの、一は新代英文系統のものである。前者は、明の天啓五年(寛永二年、一六二五年)の「況義」、後者は約二世紀後の、淸の道光廿年(天保十一年、一八四〇年)の「意拾喩言」である。「況義」は寛永七年の禁書目にも揭げられ、三浦梅園の「五月雨抄」にも禁書として錄してあるから、寛永初頃我國にも渡つたかと思はれるけれども全く殘つて居ない。巴里の國民文庫にその寫本が僅か二部存するのを先年私は筆寫して紹介しておいた。舊教徒トリゴー(Trigault)漢名金尼閣の譯である。「意拾喩言」は新教徒ロバート・トーム(R. Thom)の譯で、嘉永安政年間我國にも傳はり、漢學者や志士の間にも愛讀せられ、南蠻本とは違つた意味の感化を幕末の我國思想界の一部に與へたらしく思はれる。卽ち警世の書として讀まれたことは、故岡崎桂一郎博士舊藏「伊娑菩喩言」の跋文として安政四年十一月吉田松陰が記した慷慨の文辭によつて察せられ、イソップを時世諷刺に用ゐた佛蘭西の詩家、ラ・フ

オンテーヌの先例を連想させるものがある。

英譯本で最も有名なのは明治五年乃至八年版の渡部溫譯「通俗伊蘇普物語」六冊であるが、其以後の英譯本に至つては枚擧に暇がない。

南蠻伴天連たちは內典としては聖書に次いで廣く讀まれたと云ふイミタシオ・クリスチを、外典としては、イソップを譯したが、舊敎徒の宗敵とも云ふべき彼のルーターも亦、イソップを讃して聖書に次ぐ良書として自らその譯筆をも執つたといふ事實は、伊曾保物語の價値の超宗派的なることを示すと共に、かゝる二大良書が三百年の昔吉利支丹の手に依つて我國に傳へられた勞は忘るべからざるものであらう。

（昭和十年二月刊岩波講座「日本歷史」所收「南蠻文學」抄）

伊曾保物語校訂の後に

舊刊の伊曾保物語、近頃日本敎育文庫（訓戒篇下附錄）に收められて世に出で、又別に名著文庫の一卷として現れんとす。予の昨年本誌に附錄して公にせる文祿舊譯本亦此際新に單行せられて慶元舊譯本と相對照せらるゝの機に會せり。既に補註を加へ校訂を了りて猶意に滿たざる所少しとせず、乃ち本號の餘白を借りて更に洋語寫音法につきて校勘の記を添ふ。

文祿本の原書 Esopo とあるを、予文字の儘にエソポと譯せり、さはれ葡萄牙の發音法、アクセントなき語頭のeは、殆ど皆iと讀むを普通とすれば、寧ろイソポと翻して本文中盡く伊曾保とのみ書綴りし方適當なりしならむ。然れども、Egypt は慶元本既にえしつとと書き國字記入の世界古地圖上亦えしととせるが如き例ある外、村上直次郎氏の辭彙(1)にも ecclesia 等十數語寫音の舊例皆えに由り、語頭のeをいと書ける用例

僅に二語に止まるを以て見れば、一概に語頭にいをのみ書くべきにあらじ。古例既にいきりんじやとも、えきれんしやとも書けるが如きことあれば、イソポ、エソポ孰れにても不可なきに似たり。

慶元本あもうにや、あていえなす、ばびらうにや、りいびやの如く長呼を寫して、文祿本の新刊書皆短呼の儘にせり。前者の寫音完全なるに相違なし。なつらの語文祿本及び村上氏の辭彙共に短呼したれど實は第二音は强勢長呼たるべく、同辭書中、又これいぢよ、すべりよれいすの用例の表音法の如く矛盾に近きものあり。

文祿羅馬字本には日本語にジ（ji）ヂ（gi）の別極めて判然たり。こは國字新刊本の假名遣に徴して之を知るを得べし。然るに予フリヂヤ、エヂツトを書けるに對して慶元本ひりしや、えしつとと記し、予コレジヨ又コレジオとせるに、辭彙所載の古例これいぢよと爲すが如き相違あるを知る。これらは和洋兩土に於けるジ、ヂ二音轉變の時代精査の上可否を決すべきも、而も差當り孰れかに一定すべかりし所なり。

Nectenabo をネテナボとなせるは予なり、ねてなをと書けるは慶元本なり。兩母音

間のbは、摩擦音に發音せらるゝ葡國語の習ひなれば、をに近く響きたるが爲に、斯く寫取りたるとおぼし。然れども辭彙の他例にはBV皆ば行に記せるを見る。但し現にヴオンターデ（Vontade）と葡國にて讀めるをも、此土にては古くをんたあでと寫せるが如きは異例に過ぎず。

其他精密に論ずれば、マシモ・ブラヌーデとあるはマシムと讀む方葡國音の實際に近きが如き點あれど、あまりに煩はしければ一々指摘の勞を省けり。異日幸に改訂の機あらば、以上諸點と共に微瑕をも除きて希くは完璧たらしめんか。（六月十三日記）

（1）村上氏の辭彙又は以下單に辭彙とせるは、史學雜誌一四編一〇附錄『往時の西洋交通が國語に及ぼしたる影響』の一篇を指す。

（「藝文」明治四十四年七月　第二卷第七號）

岩波文庫「天草本伊曾保物語」後記

(一)本書は、今を去る約三百四十年前、文祿二年（西紀一五九三）九州天草の耶蘇會學林に於て刊行せる、羅馬字綴日本文 "ESOPO NO FABVLAS" 「イソポの喩言（フツブラス）」 卽ち "Æsop'S Fables" ――イソップ物語を、國字に改めたものである。こゝには我國に於る古版本の書名に隨つて「伊曾保物語」と題した。

原本は倫敦の大英博物館に天下一本を誇る希覯書であつて、同じ學林より刊行せる羅馬字綴日本文「平家物語」及び「金句集」と合綴せられてゐる。是等の原本はその總序に由て明かなるごとく、語學と教化の目的を兼ねて、當時の外人宣教師には邦語を、邦人信徒には洋語を習得せしめる爲に著されたのであつたが、之を我國に於る西洋文學移入史の上から見れば實に初度の譯書となつたものであり、また國文學史の側から言へば近世國語國文研究上の貴重な一資料として永く記念さるべきものであらう。

原本の文體は主として桃山時代に於る京阪地方の談話體口語文であるが、原本はその發音を寫すに當つて精密な羅馬字式寫音法を規定し、長短開合清濁等いづれも之に依て綴字してゐる。本書の飜字は原本の發音を出來るだけ保存したから、讀者は本書を通じて當時の口語の發音や語法の特色を理解されると共に、用語行文の雅馴な趣にも感興を催されることと思ふ。用語の解釋、漢字の充當等に際しては、古節用集、吉利支丹版字集、舊刊國字本伊曾保物語等を參照した。振假名は讀みまぎらはしい場合や、當時の慣用や訛言など特異な發音を示す爲に用ゐ、原本の外語は片假名を以て葡萄牙語風に表はし其の對照表を本文の末に附加した。句讀點、章節の區劃は原本に從つたが、讀み易いやうに改めた個所もある。原本の誤植と認め得る數個所は訂正しておいた。

本書は讀物としての興味を主眼とした爲、また此の文庫本としての紙面、頁數の制約の爲に、詳密な校註等は割愛した。本書に由て興味を起され、更に深い研究を志される方は、拙著舊刊の「天草本伊曾保物語」（改造社版）附錄の諸論考、並びに拙著正續「南蠻廣記」（岩波書店版）其他を參照せられたい。なほ岩波講座「世界文學」および岩波

版「教育學辭典」中の拙稿「イソップ」をも參考ねがふ。

最後に私の飜字の對校等に大和宇陀の木水彌三郎君を勞したことにつき、深甚の謝意を表する。

（註（一）昭和十四年三月岩波書店發行）

少年少女世界文庫「イソップ物語」後語

(一) この物語の原著者イソップといふ人は遠い太古のギリシヤ人でした。ギリシヤ本土でもこれらのお話を櫻門賢者政治家たちにしてまはつて諷刺したり訓戒したりしてみんなにもてはやされてゐましたが、はてはそれが過ぎてたたりを成し、そのために身を亡ぼしたと云ふことです。元來は小アジヤ邊の生れで、ギリシヤ本土よりも東方の人でしたが、廣く内外諸國島々をもまはつてお話をして、人人を教導したと云はれてゐます。然し、今日殘つてゐるイソップ物語のお話の中には、ほんとのイソップが自身で語つたものの外に、當時や後世のイソップ流の賢人が話した類似のお話が澤山まじつてゐます。話の數は、初めどのくらゐあつたか、それは確かにわかりませんが、後世の本には三百ぐらゐとなつてゐます。もつと多いのも、もつと少いのもありますが、先づその位多數に上つてゐるのです。最初はイソップの面白い略傳などは、むろん無かつたので、それ

が添ふやうになつたのは近代の初めあたりのことでした。もともとイソップ自身が一つの本に書きまとめて編輯したわけではなかつたのですから、最初の原形などがわからう様はありません。上つては足利義政時代の一休禪師のやうな名僧の一休咄とか、少し下つて太閤秀吉時代の曾呂利新左衛門の曾呂利咄とか云ふものが傳つてゐますが、内容は別としてイソップ話も、どこかその鋭さや滑稽味や圓轉滑脱において、その諷刺や教訓や奇智縱横において、それらの咄に趣が似てゐないでもありません。

イソップの年代は、西暦の紀元前六百年代に遡ります。ギリシヤの七賢人の頃の人です。これはむろんおほまかな年代なのですが、精しいことは判りません。さうすると、大體神武天皇の御在世の頃に生れて、綏靖天皇の時代まで生きてゐた人だといふことになります。支那にすると孔子よりも少し古く、印度にすると釋迦よりも以前に當つてゐます。然し今日のイソップ物語の中には、支那の書物に出てくる話と同じ話もありますし、又殊に佛教の中にはイソップ風の話がかなり多く見えてゐます。西方から東方に傳はつたものもあり、東方から西方に傳はつたものもあつて、共通なお話や同源のお話が

往々あります。

イソップ物語は世界的に弘まつてゐます。日本に渡つたのは、今から三百五十年以上も昔です。秀吉時代にロオマ字綴りの譯本が出版され、德川初期に平假名交りの譯本が何度も刊行されて、すでにその頃にも隨分もてはやされましたが、明治以來今日までの間に何百となく種々の形において現はれました。私はわざと最古の日本版を擇んで、それから面白さうなお話をぬいて皆さんに讀んで戴かうと思ひます。

私が一番ありがたく嬉しく思ひますのは、東京帝大の兒嶋喜久雄先生から口繪や挿畫を頂戴したことです。實に格別な御好意で、定めし皆さんも喜んで下さることと存じます。（昭和十三年十二月）

（註（一）昭和十四年〇月小山書店發行）

樂しいイソップ

このごろだいぶん書誌學が盛んになつた。日本の書誌、支那の書誌ばかりでなく、ミルトン、シェークスピア、ブラウニング、ブレーク等の書誌の研究が盛んになり、壽岳文章君などもこの方面の專門家として勉强してゐるので、同君の「ブレーク書誌」などは實に立派なものであつた。

私のイソップ研究もやはりイソップ書誌學の一つに違ひないので、日本に於るイソップの文獻は目につき次第集めてゐる。集めては、帳面にはりこんでゐるが、それがもう何冊かになつた。

先年京都でイソップ書誌の展覽會を開いたが、東京でも松屋で、もつと廣い範圍の童話書の展觀があつて、それを見たが、たいへん參考になつた。

その京都の展覽會に船川未乾君のエッチングによる挿繪が出品されたが、これは外國

にもまだ見ぬほど立派なもので、船川君は三十枚を完成して百部限定、定價七十圓といふことで「ぐろりや・そさえて」から出版する筈であつたが、惜しい哉船川君は、その仕事をいくらもしないうちに、なくなつてしまつたし、「ぐろりや・そさえて」の方も失敗してこの立派な本が立ち消えになつた。惜しい限りである。

本といふものは面白いものである。二十年以前には人が捨てゝ顧みなかつた本が、一度掘り出されると、あちらにも、こちらにも出て來る。天保版のイソップなんかも、このごろでは三年に一冊位出て來るやうになつた。始めは桑木巖翼君が持つてゐたのを、借りてつかつてゐたが、今では自分で二部持つてゐるし、友達も一部持つて居る。古本屋のごみの中から掘り起されて珍重されることになつたのである。

イソップ書誌學上の大切な文獻が最近發見されて、寫眞にとらせておいたが面白いものである。北野神社の宮司山田新一郎氏が、萬國新聞紙といふのを持つて來て貸してくれたが、これは旬刊であつたらしく、美濃版の、今日でいへばウィークリーとかセミモンスリーとか言つた性質のものであらう。編輯者は英人のベーリーといふ人で、横濱八

十三番館から出て居つた。その慶應三年二月中旬發行のものに「鼠の會議」「狐猫の智」の二篇が出て居る。あとの方のには挿繪もあつて面白いものである。

イソップは大てい支那譯になつたものを宣教師が日本へ持つて來てひろめたといふやうなことも多いのであるけれども、この「萬國新聞紙」のは、編輯者が英人であるだけに、英書からの飜譯であらうと思はれる。

イソップの文獻はいろいろな、思ひもつかぬところへあらはれるので、見落すことが少くない。この「萬國新聞紙」にも出てゐる、鼠が猫のくびに鈴をつけに行く話などは、しばしば政治記事の中に引用されてあらはれて居る。また濱口雄幸氏の遭難の時にも「ライオンが針にさゝれた」と書いた新聞があつた。こんなものはいくらも見落してゐることであらう。

私がイソップを始めた時には、まだ子供たちが小さくて、イソップのお話に興じてくれたが、末の娘も嫁いでもう母親にならうとしてゐる。私ももう二・三年で、大學も停年になるから、さうなれば、私は孫達に取り圍まれながら、イソップを勉強してゐるであらう。本卦がへりに「イソップ書誌」を出版するのも面白いかも知れぬ。まだ孫達は本を讀むまでにならぬが、孫達がイソップを讀むやうになることは、私にとつては樂しい期待である。

（「大阪時事新報」昭和八年十一月一日）

伊曾保物語展觀目錄

例　言

一　伊曾保物語展觀につきては、本年の春以來東西の先輩知友諸氏の助力に依りて準備漸く進みつゝありしが、延びつゞけし擧句ながら今日を以て開催するに至れるは、予にとりて喜ばしき限りなり。

一　東京にありては、帝國圖書館・高等師範學校・大槻如電翁・佐佐木信綱博士・桑木嚴翼博士・吉野作造博士・林若吉氏・內野五郎三氏・角田龍雄氏・齋藤惣三氏・笹野堅氏・嘉治隆一氏より、名古屋にありては市立圖書館より、伊勢山田にありては神宮文庫より、大阪にありては鹿田文一郎氏より、京都にありては龜田次郎氏より、それ〴〵貴重なる圖書を借用して以て展觀に供し、書物の趣味と研究とに資するを得たることを深謝す。その他、圖書寮の鈴木・橘井・大澤三氏、帝國圖書館の松本

喜一氏・東京高等師範學校の松井簡治博士・岩崎文庫の和田萬吉博士・樋口氏・東洋文庫の圓下大慧氏・神宮皇學館の森田實氏・名古屋市立圖書館の阪谷俊作氏・東京の三村清三郎氏・山田清作氏・足利衍述氏・園池公功氏・藤田德太郎氏・信州上田の飯島花月翁・京都の藤井紫影博士・小山源治氏が、この展觀と集書と研究とに對して直接はた間接に與へられたる好意を銘記せざるを得ず。尙この以外にも配慮を被むりし方々少からず、一々貴名を錄せず。

一　神戸グローリヤ社の伊藤長藏氏は、この展觀につきて終始格段の興味を有し、本邦に於て實物を得がたき十五世紀の古版其他稀古の伊曾保の寫眞數十葉を特に英國に注文して調製取寄せ、また歐洲の伊曾保古版本新刊書の數々を購入し、或は古版洋書の書志類を貸與し、且つこの假書目を印刷せらるゝ等、予輩の展觀と研究とに多大の便益を供せられたるを感謝す。洋書部の最多數は伊藤氏の藏書にかゝるものなり。その間※符あるもののみ、京都大學圖書館及び拙藏に屬す。

一　本年七月七日は、伊曾保研究の率先者たる上田柳村博士の十三回忌辰に先だつこと

二日なり。故人を懷ふの情更に甚だ切ならずんばあらず。

一　追つて予輩は邦文伊曾保物語の古本稀籍美本のたぐひを網羅し、西洋の古活字本及び古版挿畫類その他新古の珍書善本の代表的なるものを選びて寫眞譜を作り、以て東西伊曾保書志の優れたるものを刊行せんと欲するなり。

一　この假目錄は、敢て書志學上の規定に循はず、且つ迅速に編成したれば時に自然の錯誤遺漏不統一もあるべく、又有意の重複と便宜の記載法とも交れり。覽者の諒察を乞ふ。

昭和三年（一九二八）七月一日

天草吉利支丹系統本

一、天草本羅馬字印寫本（タイプライター）（明治四十一二年手寫本ニ依ル）　一冊

二、文祿舊譯伊曾保物語（藝文連載合綴本）　明治四十三年　新村出編　一冊

三、文祿舊譯伊曾保物語（單行本）　明治四十四年　新村出編　一冊

四、（附）天草本寫眞（伊曾保略傳卷首）寫二倍大　二葉

五、（附）中外新聞第二次第二十三號　明治二年七月九日　合綴一冊

狼と羊の喩の事

德川初期古版本　三卷（上中下）七種

一　古活字十一行本（無刊記）

六、帝國圖書館所藏本　尾府内庫圖書等ノ印アリ　合綴一冊
七、京都大學保管本　百井文庫、寶鏡寺ノ印アリ　三冊
八、（附）岩崎文庫本寫眞　狂歌堂文庫、眞顏、山岡文庫雲村文庫等ノ印アリ　二葉
九、（附）同　（訪書餘錄第六篇第三十五號一）　一頁

二　古活字十二行甲種本（無刊記）

一〇、大槻如電翁所藏本　觀瀾閣等ノ印及識語アリ　三冊
一一、内野皎亭氏所藏本　山崎美成、狩谷棭齋、神田孝平、小中村清矩等ノ印記アリ　三冊

三　古活字十二行乙種本（無刊記）

一二、林若樹氏所藏本　上卷　中井藏書等ノ印記アリ　零本一冊

一三、（附）圖書寮所藏本寫眞　不忍文庫、阿波國文庫ノ印アリ　二葉
一四、（附）安田氏松廼屋文庫災前所藏本寫眞　（江戸時代小說展覽會陳列書目錄第一圖右面）南畝文庫、篁徑文庫ノ印アリ　半頁

四　古活字十二行丙種本（無刊記）

一五、新村出所藏零本　下卷　一冊
一六、（附）安田氏松廼屋文庫災前所藏本寫眞　（江戸時代小說展覽會陳列書目錄第一圖左面）安政五年文國岡田康禮珍藏トアリ　半頁

五　古活字十二行丁種本（無刊記）

一七、角田竹冷翁舊藏本（中卷缺）　生川正香ノ識語アリ　上下二卷　合綴一冊

六　寛永十六年活字本（十二行）

一八、東京高等師範學校所藏本　待賈堂、福田文庫ノ印、芸堂ノ識語アリ　三冊

一九、大槻如電翁所藏零本　下卷　一冊

二〇、（附）上田柳村博士手寫本　高師本ニ依ル　合綴一冊

二一、（附）新村出所藏舊寫本（寛永十六年ニ依ル）闌字記入アリ　合綴一冊

七　萬治二年整版繪入本（十二行振假名句點附）

二二、帝國圖書館所藏本　爲永春水ノ本ト云、又識語附箋アリ　合綴一冊

二三、名古屋市立圖書館所藏本　鈴木朖ノ識語アリ　合綴一冊

二四、京都大學圖書館所藏本　三冊

二五、（附）稀書複製會模印本（大正十四年）　三冊

二六、（附）岩崎文庫所藏本寫眞　上卷表紙ノ面ニ附箋アリ　一葉

二七、（附）十錢文庫本（萬治舊版伊曾保物語）（明治四十四年）　一冊

二八、（附）日本教育文庫本—訓戒篇下（明治四十四年）　一冊

二九、（附）文明源流叢書本—第一冊（大正二年）　一冊

德川時代拔萃刊本

三〇、戲言養氣集　飜刻本（未刊隨筆百種卷八）　一冊
原本元和頃活字、烏と狐の事（下卷）

三一、爲愚痴物語　卷五　曾我休自、寛文二年刊（八冊ノ内）　一冊
第一、鼠ども集り談合評議の事（繪アリ）

三二、繪入教訓近道　爲永春水　天保十五年　桑木嚴翼氏藏　一冊

三三、同　林若樹氏藏　一冊

三四、同　飯嶋花月氏舊藏　一冊

德川初期古寫本（無識語）

（附）明治初期開版本

三五、佐佐木氏竹柏園文庫所藏袖珍本　蝴蝶裝　三帖
石川氏舊藏袖珍叢書（移動文庫）ノ一部、寛永頃書寫

三六、佐佐木氏竹柏園文庫所藏本　蝴蝶裝　三帖
箱ニ中院通茂卿筆トアリ

三七、佐佐木氏竹柏園文庫所藏卷子本　三卷
箱ニ立甫筆トアリ、太田全齋原藏、日下部鳴鶴翁舊藏

三八、神宮文庫所藏本　三帖

三九、鹿田氏松雲堂所藏本（上卷缺）　中下二帖

四〇、（附）大久保常吉氏編　明治十九年二月刊　一冊
東京春陽堂刊本伊曾保物語（四六版）
日下部鳴鶴翁舊藏（竹柏園現藏）本ニ依ル、鹿田文一郎氏所藏

四一、（附）同書京都尙書堂飜刻本　明治十九年四月刊　一冊
鹿田文一郎氏所藏（銅版複製四六版）

四二、（附）同書京都改進堂飜刻本　明治二十一年刊　一冊
吉野作造氏藏（銅版複製小形本）

支那舊譯本

四三、況義（抄錄本）　一六二五年（明天啓五年、寛永二年）　一冊
金尼閣 Nicolas Trigault 抄譯

四四、（附）禁書目錄　明和八年京都書林發行　一冊
貞享二年南京船持渡唐本國禁耶蘇書ノ中

四五、（附）十七八世紀歐洲人在支刊行書目考（三九頁）　一冊
一八八三年刊行、アンリ・コルディエ著

支那新譯本

四六、意拾喻言　蒙昧先生書、門人懶惰生編（スロース）　一冊
（說明ハ英文）英人ロバート・トーム Robert Thom
一八四〇年（清道光二十年、天保十一年）廣東刊

四七、遐邇貫珍連載意拾喻言　每號一則　四冊
一八五四年（咸豐四、安政元）及翌年香港刊、吉野作造氏所藏

四八、桑華新話所錄喻言一則（四肢反叛）　一冊
安政頃活字版

四九、伊婆菩喻言（七十三則）寫本　一冊
（附）駿河田中藩儒增田貢寫本序跋　松下村塾吉田松蔭跋文

五〇、中外新聞（第二十號、外篇八號同十一號）　三冊
明治元年閏四月五月（喻言三則）唐通居士（柳川春三）和譯

五一、漢譯伊蘇普譚　阿部弘國訓點　一冊
大槻磐溪序　明治九年刊

五二、漢譯批評伊蘇普物語一名伊婆菩喻言　一冊
小野筑山訓點、前田林外編　明治三十一年刊

邦人支那譯本

五三、北京官話伊蘇普喻言　明治十二年刊　一冊
渡部溫ノ伊蘇普ヨリ重譯ス　龜田次郎氏藏　中田敬義譯

五四、寓話詩　越後東拿散人小柳一藏著　一冊
大正七年刊

明治早期新譯本（其一）

五五、通俗伊蘇普物語　渡部溫譯　木版　和裝六冊
明治五年至八年　トーマス・ジェイムス英譯本ニ依ル
藤澤梅南、某氏筆邨、河鍋曉齋挿畫

五六、英文伊蘇普物語　渡部溫譯刻　和裝二冊
明治五年沼津鏤刻、齋藤惣三氏藏、中村敬宇藏書之記ノ印アリ、挿畫ナシ

五七、同　林若樹氏所藏　和二冊

五八、英文原書イソップ喩談　英トーマス・ジェイムス譯　一冊
一八四八(嘉永元)譯者序、一八六三(文久三)刊　笹野堅氏藏
中村敬宇書入本、成瀨隆藏、菊池大麓諸氏ノ姓名モアリ

五九、(附)同新刊本　一冊

六〇、改正增補通俗伊蘇普物語原書　トマス・ゼームス原譯　渡部溫補纂　一冊
明治二十一年東京鏤刻、建部(ケンベ)某ノ挿畫アリ

六一、北京官話伊蘇普喩言　中田敬義譯　一冊
(前出、第五三號ヲ見ヨ)

六二、河鍋曉齋錦畫伊蘇普物語之內　一卷
明治十年頃カ、コ、ニハ五枚十圖アリ

明治早期新譯本（其二）

六三、西洋童話　明治六年大坂刊　和版一冊
紀州今井史山、イソップ喩談三則アリ

六四、寓意勸懲伊蘇普物語　明治二十一年刊　洋一冊
英タウンセンド　田中達三郎譯

明治中期以後諸本

六五、伊蘇普實傳　明治三十二年刊　一冊
堀三友譯、秋野繁吉記

六六、伊蘇普戲傳　右本ニ同ジ　一冊
鹿田文一郎氏藏

六七、（附）少年書類　新伊蘇普物語　佐藤治郎吉　一冊
明治二十五年博文館、挿畫アリ、イソップ喩言ハ一二ノミ、他ハ新編ナリ

六八、（附）新伊蘇普物語　巖谷小波新作　原稿八枚
年代未詳、舊來ノイソップ談ニハアラズ

六九、新譯伊蘇普物語　上田萬年　一冊
梶田半古畫、明治四十年刊

七〇、新イソップ物語　楠山正雄　大正七年刊　一冊

七一、新錦繪帖、イソップ喩譚　小山内薫　一冊
小川千甕畫　大正九年刊

七二、伊曾保物語未乾畫集（デッサン）　昭和三年畫　四葉

上田敏博士遺業

七三、伊曾保物語考（史學研究會講演集第四集拔刷）明治四十三年講四十五年四月刊　一冊

七四、伊曾保物語新寫本（寛永十六年活字本ニ依ル）　三冊

七五、同上田氏自筆寫本（上中全部及下卷初四葉ノミ）前出　合綴一冊

七六、伊曾保物語研究斷簡（自筆）　數葉

七七、伊曾保研究自記ノート（自第三號至第九號）　七冊

歐洲古版本書志類

1. Bibliotheca Spenceriana
スペンサー文庫所藏古版本書志　卷一　一冊
Dibdin 編
二二一頁より二四六頁までの中に伊曾保のことあり、（一〇二號至一一一號）

2. Typographical Antiquities
大英古活字版史　卷一　一冊
J. Ames, W. Herbert 編T. F. Dibdin 增補、一八一〇年刊
カックストンの卷、二〇八頁より二二〇頁までの中にカックストン版伊曾保のことあり、挿畫五圖あり

3. Bibliographical Decameron
珍書十日物語　卷一　一冊
Dibdin 著　一八一七年刊
一九一頁に伊曾保挿畫一圖あり

4. Early Florentine Woodcuts
初期フローレンス木版志　一冊
Paul Kristeller 編　一八九七年刊
五九頁、一一〇頁に、一四九五年及一四九六年 Pacini 本伊曾保よりの木版挿畫三圖あり

5. Les Livres à Figures Vénitiennes
ヴェニス版畫書志　初篇上下二卷　大二冊
一九〇七年、一九〇八年刊
上、三一頁至八五頁、下、三二三至三四二頁、右の中に一四七九年乃至一五四六年間の伊曾保古版本十餘種よりの挿畫二十二圖を載す

6. 倫敦マッグス書店目錄四七〇號（一九二五年クリスマス號）　一冊
一二二頁（二〇四號）Tuppo 本、拉伊兩文の伊曾保略傳及物語、一四八五年ナポリ版、書目一三二、一三三、一三六の諸頁に對して挿繪寫眞あり

7. 同　目　錄　第五〇〇號（一九二八年）　大冊
一四九〇年バーゼル版本のことあり、瑞西に於けるイソップの最古版

8. Lowndes 書志學手引　卷一　一冊

一四八四年以後十八世紀中までのイソップ版本三十九部を錄す

9. 大英博物館所藏初期英國古版書志　＊一冊

二十一二頁を見よ、一六四〇年までのイソップ古版九部を錄す

10. 同　補遺　＊一冊

一〇七頁至一一二頁に、十九世紀までの主要なるイソップ版本七十七部を錄す

11. ポラード Pollard 古版挿繪本書志　一冊

歐洲諸國に於ける著名なるイソップ古版本九種について問々挿繪をも交へて略說せり、獨逸のスタインヘーフェル本をはじめ、伊國ナポリのトゥッポ本や、英國のカックストン版に及べり

12. 十五世紀古活字版一覽　卷一　一九一〇年刊　一冊

イソップ古活字本一六四種を錄せり、その中知られし印行年代は一四七三年を最初とし、逐次一五〇〇年に至る

（一）イソップ略傳及喩言、希拉二體文本　一部

（二）喩言拉文本　七六部

（三）喩言英文本　二部

（四）白耳義文本（和蘭文）　二部

（五）ボヘミア文本　一部

（六）佛文本　九部

（七）獨拉二體文本　一部

（八）獨逸文本　一五部

（九）低獨逸文本　一部

（十）西班牙文本　三部

（十一）伊拉二體文本　一九部

（十二）伊太利文本　一六部

（其他略之）

以上、第十五世紀後半期中、恐くは末の三十年程の古活字本なり、今次の展觀書中、恨むらくは一もこの所謂インクナブラ Incunabula（搖籃期間古活字本の義、意譯せば初期活字本）なし

12a. Bibliographical Dictionary
辭引體書志　卷一　一冊
一八〇二年刊、二一頁至二九頁にイソップの一四七六年版乃至一七八〇年版を錄す、約六十五部

12b. Berjeau 編、紙魚（ブックウオーム）　卷三　一冊
一八六八年刊、七〇頁至七三頁にイソップのことあり、伊翁肖像の摸印一圖あり

伊曾保研究書志類

13. Joseph Jacobs 著、カックストン伊曾保物語書志及び伊曾保流喩言史（英文）　＊二冊
一八八九年刊、上田敏博士舊藏、京大圖書館現藏

14. George Keidel 著、伊曾保喩言文學要覽（英文）　一冊
一八九六年刊

15. Georg Thiele 著、拉丁文繪入伊曾保物語古寫本研究報告書（獨文）　一冊
一九〇五年刊（蘭國）、原書は十二世紀の古寫本

16a. Leo Sternbach 著、伊曾保明辨（拉文）　一冊
一八九四年刊（ポーランド）

16b. K. Mckenzie 著、ダンテとイソップ喩言　一冊
（一八九八年五月、米國ダンテ協會第七十回報告書附錄中の一小論文）一九〇〇年刊

歐洲古活字本挿繪本寫眞類

17. ヴェラスケス畫伊曾保肖像寫眞　一葉

18. 伊國ッッコ本繪入古寫本（一四六二年、寛正三年寫）　＊一葉
ロートグラフ

19. 英國カックストン版本（一四八四年、文明十六年版）
摸刻＊及寫眞　數葉
20. 其他十五六世紀古活字本古寫本等寫眞　數十葉
21. 歐洲大戰爭初期イソップ漫畫繪葉書　＊六葉

歐洲イソップ古版本（其一）

22. 一五二四年（大永四）瑞西バーゼル版拉丁語本　＊一冊
イソップ等十三家喩言集、小形
23. 一五三三年（天文二）瑞西バーゼル版希臘拉丁兩語本　一冊
左右兩頁に希拉兩文相對せり
24. 一五四五年（天文十四）現白國アントワープ版拉丁韻文本　一冊
今度の展觀中にて活字古雅に見ゆ

25. 一五六六年（永祿九）獨國フランクフルト版
拉丁獨逸兩語對譯本　一冊
26. 一六六〇年（萬治三）獨國フランクフルト版
希臘拉丁對譯本　＊一冊
每頁左右二欄に希拉兩語を分刷す、（畫あり）
27. 一六八二年（天和二）ロンドン版拉丁語本　一冊
28. 一七一八年（享保三）オックスフォード版希臘語本　一冊
牛津のクラレンドン版にして、古書に散見せるイソップの出典を擧げたり、說明は拉丁文
29. 一七四一年獨國ライプチッヒ重版本　笹岡民次郎氏藏　一冊
30. 一八〇〇年（寬政十二）伊國バルマ王室印行本　一冊
左右兩頁に希臘拉丁兩文を對照す
31. 同　異版大本　＊一冊
各頁左右二欄に希拉兩語を分刷す

歐洲イソップ古版本（其二）

32. 一五六一年（永祿四）現白國アントワープ版佛文本　一冊
草書活字にして今度の展觀中にて出色のもの

33. 一六九三年（元祿六）現白國ブラッセル版佛文本　一冊

34. 一七七一年（明和八）佛國ルワン版佛文本　一冊
王室印行

35. 一七八八年（天明八）獨國ライプチッヒ版露文本　一冊

英文イソップ近代版本

36. 一六六五年（寛文五）版本　美本　一冊
John Ogilby 編述

37. 一六六八年（寛文八）同上再版本　大本　一冊

38. 一六八七年（貞享四）版本　一冊
Francis Barlow 編述

39. 一六九八年（元祿十一）版本　一冊
政治的諷刺畫本なり

40. 一六九九年（元祿十二）版本　零本　一冊
Roger l'Estrange 編述　二冊のうち上冊缺く、大本

41. 一七〇八年（寶永五）再版本　二冊
イソップ其他の喩言を輯む

42. 一七六一年（寶曆十一）版本　一冊
Dodsley 編述

43. 一七六五年（明和二）同再版本　一冊

44. 一七九三年（寛政五）版本　銅版挿畫あり　二冊
45. 一八一八年（文政元）版本　Thomas Bewick 編述、銅版挿畫あり　一冊
46. 一八一八年（文政元）版幼年讀本　粗畫入り　小形　一冊
47. 一八二五年（文政八）版本　Samuel Croxall 編述　第二十三版　一冊
48. 一八五七年（安政四）版本　C. H. Bennett 挿畫、漫畫風　薄キ大本　一冊

英文兒童本續入本其他新刊本

49. 新日本英語綴字法教科書　一冊

一八七二年（明治五年）米國版にて日本南校教授、グリフィス編、第百十課に英文伊曾保物語より十一課を抄錄し、挿畫を入る、笹岡民次郎氏藏

50. Walter Crane 畫本　Edmund Evans 彫　一冊
51. Harrison Weir 挿畫本　Mary Godolphin 女史作、單綴音語の文　一冊
52. Charles Robinson 挿畫本　Grace Rhys 女史著、一九一五年刊　一冊
53. Charles Livingston Bull 挿畫本　J. H. Stickney 著　一冊
54. S. R. Praeger 挿畫本　Lena Dalkeith 作　一冊
55. 四色版挿畫單音語本　一冊

56. F. C. Tilney 挿畫本　一冊
同人綴文

57. Edwin Noble 挿畫本　一冊
Capt. Ederic Vredenburg 刊

58. 同　異　版　一冊

59. Arthur Rackham 挿畫本　一冊
Vernon Jones 新譯、C. K. Chesterton 序說、一九二四年刊

60. Charles Folkard 挿畫本　一冊

61. Louis Rhead 挿畫本　一冊

62. Ernest Benn 刊本　一冊

63. F. B. Opper 挿畫本　一冊
一九一六年刊

薄キ假綴

64. Paisley Alex. Gardner 刊本　一冊

65. M. Maitland Howard 挿畫本　一冊

66. Blanche Winder 新編本　一冊

67. 同上 Harry Rountree 挿畫本　一冊

68. Precy J. Billinghurst 挿畫本　一冊
Sir Roger l'Estrange の英譯本より、Kenneth Grahame 序說　＊一冊

69. 諸家譯述附說本
S. Croxall, R. l'Estrange 譯述、G. F. Townsend, L. Valentine 附說　一冊

70. G. F. Townsend 新譯本
明治二十一年田中建三郎譯本はこの舊版本に依る、上田敏博士のイソップ研究書類中にもこの舊本を添ふ

71. 各人文庫（エヴリマンス・ライブラリ）本　＊一冊
イソップをはじめ、古今東西諸家の喩言を列擧す、リス氏の序說あり

72. Thomas James 新譯本　　前出
明治早期新譯本の部に、本書の古本新本飜刻本の各種を擧げたり、今尙典據として用ゐる

73. Lucy Fitch Perkins 挿畫本　　＊一冊

74. Richard Highway 挿畫本　　＊一冊
Joseph Jacobs 選集解說、一八九四年刊

佛、獨、蘭本及東西異體字本

75. Hachette 刊行古典小文庫所收希臘本（解說佛文）　　＊一冊

76. Chambry 序說佛譯本　　＊一冊
一九二七年刊

77. 色摺挿畫新イソップ物語（獨文）　ミュンヘン版　　一冊

78. 和蘭文挿畫本　　＊一冊

79. ピットマン速記字體本　　一冊

80. 南印度ドラヴィタ族カナラ語譯本　　一冊

伊曾保行脚

紀元節の翌朝雪がからりと晴れた東京について、私は間もなくホテルの廊下の一隅で、今度世にあらはれる上田敏全集に關して、心ゆくばかり親緣のかたたちと話しあつた。そのとき私は去年の五月大阪で最初の法被を着つゝ故人の伊曾保物語考を推稱したことなどを語つて微笑した。これが私の伊曾保行脚のふみだしであつた。

その日の午後、私は上野の會に初めて顏を出す少し前に帝國圖書館に、伊曾保を訪書することにした。かねて松本館長に願つておいた關係で、日曜日ではあつたが、宿直の横井司書の手あつい接遇で、伊曾保物語の古版本二種をはじめ、明治初期の普通書二三本を、特に事務室のデスクの上で見ることを許された。しいんとしたその一室は、この物ずきな伊曾保行脚の旅人を容れて、しんみりと一時間ほど元和寛永ごろの古活字本と萬治の繪入本とを味ふことを得させてくれたのであつた。二種ともに中川重麗の舊藏、

「中川氏藏」と小い圓形の朱印が押してある。活字本の方は、帝國圖書館の目錄には寛永十三年の版のやうに著錄してあるが刊年は本には印刷してない。多分元和の活字本としておいてよいのだらう。京都大學にあるところの本と同じく十一行の本ではあるが、毎卷首に「尾府內庫圖書」といふ大きな朱印があつて、下卷にはその外「拂」といふ文字の圓い黑印が押されてある。他に例もある如く尾張藩から明治初年ころかに賣下げたものの中の一であらう。本は表紙も題簽も三卷ながら原形のまゝに保存されてゐる京都の方のがすぐれてゐるけれど、由緒はまことにありがたいと思つた。司馬江漢が春波樓筆記のうちに紀州家にも古本があるやうに書いてあるが、少くとも南葵文庫にはそれが存しない。水戸の彰考館に現藏する寛永十六年の刊本と同樣に、今私が手にするこれも一ころは御三家の內庫にあつたものだと思ふと、由緒の尊さが感ぜられる。

もう一つの萬治本も、むざんに合綴されて取扱ひよささうになつてゐるが、これには下卷の裏標紙の裏面に貼りつけてある三葉の附箋があつて、そのうちの一葉には重要な記事が見える。更に大切なのは、朱筆を以て、「春水之本」と記入してあることである。

想像すると、或はこの本は、春水が天保の末年繪入教訓近道の原本に使つた、その所蔵本であるかも知れない。若しさうすると、一方の尾府内庫本の貴族的由來に對して、これは江戸の町人的色彩の濃厚なのが反照をなすと、私はひとりで興に入つた。かくて行脚第一日の感興をつくした後、入口につめかけて待ちつらなる閲覧者の列をとほしてもらつて、館を出て、雪解けの道をひろひひろひ、帝室博物館のまへをよこぎつて足をいそがせた。

その翌日は、同行してきた小川如舟博士の道しるべをして、東洋文庫を訪うた。

園下氏と天草版伊曾保の寫眞のこと、カックストンの伊曾保肖像の複製のことなどを話し、橋本氏のドチリイナ・キリシタン研究に關する新刊書を見たりした後に私は和田博士管理の岩崎文庫に藏するところの舊雲村文庫本伊曾保物語を再見した。思出のなつかしい書物である。その一は訪書餘錄（第六篇第三二、いはゆる十五圖の一及第三種本）にも雲村文庫目錄（第二輯乙）にも著錄されてゐる名物で、京都大學本と同じく十一行古活字本である。表紙は後のものだが、題簽は中卷下卷には元のものを中央にはりつけてある。「山岡文庫」、「狂歌堂文庫」、

「菊廼屋文庫」と、三つの朱印がすわつてゐる。そのうち狂歌堂とあるのを、雲村文庫目錄に旌長堂としてあるのは誤讀であることに氣がついた。その他の印記を存する舊所藏者は、私の未考とする所である。和田雲村翁の歿する大正九年の夏、恰も發病の當初、私たちがその書齋に於て、この本と他の一本たる萬治本とを見たことは私の大正九年七月東京訪書志に手錄しておいた所である。昨年の夏高野に上つて翁の墓に參詣しいま八年をへだてゝその書に向へば、あの老愛書家のおもかげが眼前に浮びあの高き氣焰が耳にきこえてくるやうな氣がする。さてその萬治本は、名古屋より出たもので、茶人三園なる者の舊藏であつてその附箋によれば、同じ人の所藏で吉雄氏南皐（か）の誌した活字本もあるらしい。私は名古屋では鈴木離屋の舊藏本を一見したことがあるがそれも萬治本であつた。

由緒あり思出深きこれらの二本を、文庫の掌書樋口氏から取出して貰ひ檢べてゐる所へ、思ひがけなく大阪府立圖書館の今井館長が、地誌の蒐集家を以てきこゆる高木利太氏を案内して來庫されたのに出會ひ、互に奇遇をよろこびあつた。高木氏は奈良名所八

重櫻を切離して別摺りにして猿澤池物語とか采女物語とか名づけた三冊本を舊臘得られたについて、岩崎文庫本の八重櫻を見に來られたらしかつた。この三冊本については今も當初關係したことの緣故があつたため、話は一時その本の逸話ではずみ、それからそれへと、暫時同樣な話でもちきつた。私は伊曾保や八重櫻のもとを去つて、閲覽室に出してもらつてある天草版のアルヴァレーズの羅甸文典を一閲しにいつた。それも若しや文祿三年（一五九四）出版のこの文典のうちに、平家のほかに伊曾保が引かれてはゐないかと思つたからであつた。然しそれは豫期に反してみつからなかつた。さうかうするうちに石田氏も來あはせられて、一しきり又書物の話がそれやこれやと榮えた。グローリヤの伊藤氏のドチリイナ・キリシタンにつきまとふ珍談なども出て打興じた。それは同氏がこの稀籍を獲た後、二ケ所からそれの幽靈本を東洋文庫に寶込まうと、思はくを企てた内外の書肆のあつたといふ珍聞である。

午後は二時ごろまで二三の人々と共に書物を見たり話したりしたが、私は小川氏と共に、文庫を辭し去つて、築地の本願寺に車を走らせて、九條武子夫人の告別式に參詣した。

さく花と君はも散りぬ天の下のさきはひ人と君をしいはむ

うべなうべなやまとの國に人二人ありとし思はば何か嘆かむ

との嘆聲と讃語とは私も感をおなじうするところである。

夕がた九段の下牛が淵なる大橋圖書館にひらかれた圖書館協會の評議員會に參した。地はもと蓄書調所の在つた處だときくので、慕はしく思はれた。散會後、今井氏と共に、今川小路から神保町へかけて軒並らぶ古本店をぶらつきながら、時には自分の舊著の稍手ずれて價段の低下してゐるのを流し眼にみやりながら明治初期の伊曾保の稀本はないものかと、折々眼をくばりもしたが、私は途中で疲れて來たので獨りでホテルに歸つた。

翌朝起きてみると、雪である。風もすこし添うてゐる。いさゝかためらつたけれど、勇を鼓して先づ大塚へと雪を衝いて車を飛ばせた。十數年ぶりで昔在職した學校を訪うたのである。二十年前倫敦の南部から大英博物館にかよつて天草版の平家や伊曾保を筆寫した時分を思ひおこす。こんなにちらちら雪が降つた冬のことである。それは私が

龜井氏の飜字本の天草版平家に序文を書いたときに書いておいたから今は略する。二十年後のけふ二月十四日の午前十時・構内の雪ふみわけて、しかも吹雪めくなかを、傘で身をかばひ、頸卷に口や耳を蔽ひ、元のとほりか知らと舊館階上の教員室をめざして進んだ行脚姿は、自分で自分を想像して見て、滑稽でもあり風流でもあつて面白かつた。中學生か小學生かが、雪ぶつけをして興してゐる有樣を見やりつゝ、この風流人は、案内知つたまゝ教員室に進み入つた。ストーヴをかこんで、昔ながらの大瀨松井兩博士をはじめ、舊友新知の諸教授たちが並みゐられた。私は昔がなつかしく思出が深く、人々との應接にいとまなかつた。語るべきことが溢れて困るばかりであつた。かくて松井氏に導かれて私は今度はじめての圖書室に入つて、私が目ざす本を見ることになつた。

松井氏が授業に去られたあとで、私は圖書目錄を見てはつと失望の感に打たれざるを得なかつた。天が私に幸ひしてか運が伊曾保に向つてか、折角健康と勇氣とを嚴寒中に保ちつづけた私が、時もあらうにこの雪の日を、場所もあらうに十數年ぶりのこゝ大塚の學校に、出かけて來たのは、むろん風流のためでもなく、實は懷舊のためでもなく唯

この寛永十六年卯月吉辰とあるその天下の稀本を寓目したいためにすぎなかつたのだ。來てみると何ぞはからんその本は「燒失」といふ小さな朱印が圖書目錄のその書名の下に押してあつて、大正十二年秋の、震災より後の自火のために燒失してしまつたのだといふことを發見したではないか。その刹那に起つた痛恨の情はおさへきれなかつた。私は嘆聲を掌書役の人たちに向つて發せざるを得なかつた、私が明治三十五年から四十年まで五ケ年在職してゐた間は、このがはの興味が未だ起らず從つて自然この寛永活字本を見ずにしまつた。いな、その存在をも知らずにすごしてゐたのだ。私が伊曾保に心をかたむけはじめたのは、英國で天草本を見てからのことであつて、私が西遊より歸朝した明治四十二年の春を經て、上田柳村君から、この大塚高師本の存在を聞き、且つ同君がこの本から寫させた新寫本を示されたりした時にいたつて、後ればせにあの寛永本を知つたのであつた。明治の末年三月龜田吟風君の書志によつて、その本の來歴の大要は明かにすることが出來たものの、爾來十六年乃至十九年のあひだ、つい現本を訪書する好機を失つてゐたのであつた。水戸の彰考館に同じ版本があるといふものの、この種々

ゆかりのある高師本を永久に見ることが出來なくなつたとすれば、何たる恨事ぞと私は忍びがたくなつた。安田氏の松廼舎文庫の二本を失つたその上に、思ひがけなくも今や更に別種の一本を失つてしまつたのかと思ふと、惜しくてたまらぬ情が、殊にかういふ時節に來たものをといふ殘念さと共に、いよいよこみあげてくるのである。

私は、二の次にしてあつた萬治版の方を、せうことなしに先づ請うて出してもらつた。これは思ひがけなき那珂文庫から入つた合綴一冊本であつた。那珂通世先生の舊藏本とおもふと、又してもなつかしさがつきまとふのである。寛永本の燒失をくやしがつた私に同情した主任の掌書役は、書庫に入つて探して見たらば、或はその本の燒殘りが保存してあるかも知れません、と言つて特に私のために、庫の中をさがしに行つてくれた。

當年この學校の火災は、圖書館が全燒といふのではなかつたから、萬が一燒け損じた殘缺本の、その片紙でもあつたならば、せめての心やりにしよう、いやいや、焦けくすぼつた活字本の片われの方が、却て趣味があると思へるかもしれない、などと私は腹のなかで妙な負け惜みを考へながら、胸をおどらせて待つてゐた。

所が館員は、燒失した筈のあの本は燒けずに完全に存してゐましたと、絶望した私を再度おどろかせた。私は驚喜おくところを知らなかつた。目錄の上の押印がまちがつてゐたのです、といはれたが、私は、包みきれぬ嬉しさの情を以て、館員に勞を謝し、死んだ人が生きかへつて來たのに會つた樣ですとくりかへし述べたのであつた。おまけにその本は程よく手ずれて古びた丹表紙本であつたので、私は

雪の日の伊曾保うれしき丹表紙

と、例の如き一句を吟じて情を抒べた。活字はやゝ後の世の活字だから、これまでに見た諸本に對して、見劣りはされるが、ともかくも「待賈堂」の朱印が押されて達磨屋の舊藏であることがわかりその上、私が一昨日上野の圖書館で見た萬治本の奥に貼つてある附箋の文句は、この大塚の寛永本の奥書によつて抄錄したものであることが知られたりして、私は思ひかけぬ一段の喜びに、やはり雪を侵して訪書したかひはあつたよと、うなづいた。これだから書物の趣味といふものは、昂進するばかりだなと獨りほゝゑんだ。あいにくさういふ感興をうちつけに語つてきかせる人はその場にはゐあはせなかつ

たが、私は滿面に喜びの情をたゝへつゝ、大塚の舊校を出た。それから正午までに大學圖書館にゆきたいと思つて急いで赤門をくゞつた。

姉崎館長に會つた後、私は司書某君について、もしや渡邊氏の霞亭文庫の目錄、またはそこから由來した館本のうちに、古版の伊曾保はないものかと、調べてもらつた。大塚で少々味をしめたからである。一査の後、あいにくどの部分にもございませんと報ぜられた。延いては南葵文庫本にも舊青洲文庫本にもやはり無いのであらうか。私は十數年前、災前の東京大學圖書館で、萬治本を見たやうな氣がして京都を立つ前に再三舊刊の目錄を檢したが、つひに見當てなかつた。或は自分の方の圖書館にある萬治版との混同であつたかも知れない。今復興後の東大の藏本に古版の伊曾保がないとすれば、東大は災前災後共にこの古本に御緣がないものと見える。かう獨合點をして私は姉崎氏と共に雪の止んだ山上の會食所に入り先輩知友と卓を共にして午餐した。吉野博士とは、幕末乃至明治初期の新聞紙に關して簡單なことばをかはせた。これも明治十八年の繪入朝野新聞に出た伊曾保を見たいためであつた。然し今日はとても時間のくりあはせがつか

ずさほど話を進め得なかつた。桑木博士とは、私が借受中の爲永春水の伊曾保抄刊本について語り、その複製の承諾を求めた。むろん快諾を得たが、それは私が追つてグローリヤ社に由つてその飜刻を期待したいからであつた。佐佐木博士とは、前約によつて、午後その伊曾保古寫本三種の精査をする機會が與へられてゐたから、こゝでは多くを話しあはなかつた。

かくて私は食堂を出て雪が雨になりかけて尙陰々たる空模樣のなかを、水づく雪をふみつゝ、西片町に向つた。しめつた靴下をさへぬぎかへさせられた懇篤さに總身の冷たさも回復した。先づ話頭は九條夫人の事どもに向けられ、互に盡きせぬ悲みの情を語りあつて、さまざまの述懐に時を移した。署名を永久に遺した無憂華の見かへしに、佐佐木夫人がそのゆゑよしを錄して贈られたのを私は受けて、歌をみ文をみ寫眞をみつゝ、傍らに取出されてあつた伊曾保の古卷古帖にも心をむけかねてゐたのであつた。

伊曾保の寫本三種は、すでに竹柏園の百代草にもその寫眞と共に略說されてゐるが、最もすぐれてゐるのは、寛永頃の袖珍寫本叢書に收めてあるそれである。次には、大き

な卷子本のそれであるが、その三卷はもと太田全齋の舊藏本であつて、岡本況齋がその書志に著錄したこともあり明治の末には大槻如電翁が江湖に吹聽されたこともあつた。或は繪卷物であつたかもしれないと思はれる痕跡がある貴重な本である。いづれ遠からず他の寫本刊本と共に詳かに私の伊曾保書志に解說して出版するつもりであるから、ここには細かくは述べない。たゞこの卷子本は、佐佐木氏の有に歸する以前は日下部鳴鶴翁の所藏であつたさうだが、その時分、それを前田香雪翁が解說して、明治十八年に繪入朝野新聞に大久保常吉氏が本文を連載して、翌年それを單行した一冊本がある。私は未だその現本を見ずにゐるが、この刊本も今は珍書に屬するらしい。

私は雪後の雨の中を、西片町から旅館に歸つて來て、風雨の夜を無憂華を讀みつゝ更かした。翌朝眼をさましてみると、快晴で而もうらゝかな春めいた陽氣であるので、その朝の歸洛を夜行にのばして、私の伊曾保行脚をつゞけることにした。それは、竹柏園所藏の卷子本から、往年取つて印刷に附した前記の一冊本はどこの圖書館の目錄にも見えず、唯一つ內閣文庫に存することを知つたので、昨年十月それを探りに出かけたとこ

ろ帝國圖書館に移管したと聞いたから、過般上野に照會して尋ねたがそんなことはないとの報告を得たがため、今日この機會を利用して再び桔梗門をくゞることにしたのである。そこで私は文庫の樋口司書にかねてから約束の金澤文庫本研究資料を示しがてらに、この朝文庫を音なひ、再應の調査を乞うて明治の刊本と、もう一つ萬治本の寫しかと思はれる繪入寫本と、この二つの本の存否と行方とを確かめておくことにした。所が詮索の末、刊本の方は、いつか廢棄にしたといふことがわかつた。私は失望した。然し寫本の方は、たしかに帝國圖書館に移管したことになつてゐるさうである。けれどもこの寫本の方も上野にはないことを聞かせられた私は今や宙に迷つてしまはざるを得ない。致方がないから私は內閣文庫を去り、お堀の水もぬるみ、堀ばたの柳も芽ぐみはじめさうな春の日のなかを、きのふの朝の一旦の失望ほどには失望もせず、ぬいだ外套と私の行脚袋とを手にしながら虎の門に車を驅つた。

圖書寮では鈴木事務官の室で大澤氏の手から寮本の伊曾保古版書を借覽して一閱することが出來た。これは十二行本で私のいはゆる乙種本で燒失した松廼屋文庫所藏二本の

うちの蘭字書入本と同じものとみとめられる。合綴一冊本で、裝幀の古色は失はれたが、由來は「阿波國文庫」の印と「不忍文庫」の印とがあるのでわかる如く歴としたものである。

圖書寮を辭し去つて後、午後私は更に慶應大學の圖書館に赴き、印刷目錄の上に寫本とある同館所藏の伊曾保の本體をたしかめようとした。震災に損じた建物の大修繕をしつゝあるその館は、十數年前開館式を擧げたをり、その中で私も講演をしたことがあつたが、その後程なく再訪したぎりこゝにも亦十年ほどおとづれたことがなかつた。然るに伊曾保の力はこの無性者をひきおこして、最後にこの三田の見晴しの佳い丘陵の上にのぼせた。館に入つて安食司書をたづね問ふに、その本なら、昨日私の方の館員菅沼君に託して既に京都の方へ貸附したとのことであつた。菅沼君は慶應大學の出身であるから、その東上に託して現本の來歴を見てきてもらふことにしてはあつたのだが、今それが貸出されようとは私の思ひかけぬところであつた。聞けば萬治本を明治四十何年かに繪と共に寫した極新しい寫本ださうである。二たび思ひがけぬ事に出くはして、私は安

食氏の厚意を謝しつゝも、聊か拍子抜けの氣味であつた。私は序に隱れたる滿洲研究家ともいふべき山田聯の著書と、日本亞細亞協會の圖書とを見せていたゞかうと思つて、書目を一閲したけれども、こゝにも注目した書物を見當て得なかつた。

柳の下に再び失望をくりかへして、その近所の知るべを尋ねた後私は夕刻までの二三時間を利用して、根岸の大槻兩翁を久しぶりで音づれようと思つた。イテフの語源とイソホの古版とを中心に、あの話この話ともくろみをつけたが、私の行脚は遂に根岸まではのびなかつた。歸洛後老博士の訃に接し、あゝ惜しかつたと悔恨の情にたへない。尤も私の道樂はむろんそのとき達せられなかつたには違ひないけれども、二十數年前の事を回顧すれば、この時往訪の機を失つたのがまことに遺憾に念はれるのである。但し大槻氏の古版本は、私も曾つて借用したことがあり、吟風君の書志にも出てをるから、その點の恨事はむろんありはしない。

私はその夜の汽車に身を横たへて、經緯おほき伊曾保行脚を無事にをはつていそいそ歸ることを祝福した。東京にでさへ私が訪書しきれなかつた二三の伊曾保がなほあるけ

れど、物は八分だ、風もひかず歸つた私は、人の情味の嬉しさと、風流は寒いものだといふ眞理とを今さら體驗して、密かに喜んでゐるばかりだ。再びいふ、書物の趣味は寒くもあり又暖かいものでもある。

（「書物の趣味」昭和四年三月）

繪卷本伊曾保物語の傳歴

二三年來愛書趣味のために寄稿しようと思つて取つておいた明治十九年大久保夢遊編春陽堂版の伊曾保物語の來歴を書いてみる。元來慶元系統の伊曾保物語の舊版本は、明治の末から大正の初にかけて三度叢書のうちに收められたことがあるが、いづれも萬治繪入本によつたのである。第一には明治四十三年に日本教育文庫訓戒篇下の附錄に收められ、第二に翌四十四年に十錢文庫の五卷となつて現はれ、第三に大正二年文明源流叢書第一卷に容れられた。然るに同じ慶元系統本が明治十九年に古寫卷子本から取られて出版されたことがあつたのは寧ろ私たちの意外とした所であつた。明治五年新譯整版和裝本の渡部溫の通俗伊蘇普物語は流布が甚だ多いが、十九年新刊の舊系統本の方は却て稀であるやうに思はれる。

この春陽堂版の四六判型の一冊本は、洋裝の活字本であるが、裝幀は石版色刷で、周

緣は雷文模樣、題簽の周邊には唐草、その上には天使（エンゼル）、四隅には薔薇を配し、其時代の美裝本であつたと見られる。編者大久保夢遊の序詞は明治十九年一月中旬に書かれ、二月の發賣となつてゐる。編輯者大久保常吉は朝野新聞社員として最初は繪入朝野新聞の紙上に、この物語を連載したのであつたが、その新聞紙は私のこゝ二三年間求めて未だ見るを得ざる所である。明治十八年中か或は前年あたりの連載であらうと思はれる。いつかはそれを確かめる時があらう。單行本には同新聞社の前田香雪の「伊曾保物語の考」と題する一文がある。

本文は百十三頁、伊曾保の傳記がなく、寓話は四十二しか載つてゐない。挿畫は新に弘方なる者の手に成つたものが都合二十六圖ある。慶元本三卷のうち上卷の伊曾保傳を除いて中下兩卷の寓話六十四のうち二十二話が削除されてゐる。

右の東京版を同じ明治十九年の四月、卽ち僅か二ヶ月經つて後、京都で銅版によつて模製翻刻したことがある。尙書堂發兌となつてをり、體裁は殆ど春陽堂版と同じで、裝幀の意匠が少しちがふだけに止まる。

その尙書堂の銅版に據つたか或は春陽堂の活字版に據つたかは判らないが、これら二書のいづれかに基いて新に銅版を起して翻刻した四六判の半切型、卽ち言はば袖珍本仕立の伊曾保物語が明治二十一年十一月にやはり京都で出版された。奥附には著作兼發行者として竹村友治郎の名と賣捌所として改進堂の名とが擧がつてゐる。裝幀や扉頁の意匠は全く前の二版とちがふばかりでなく、夢遊の序詞も香雪の考も共に削除してしまつた。洋裝ながら粗末な洋紙を袋綴ぢにしてあるのも體裁が異なつてゐる點である。とにかく銅版の翻刻ではあるが、單なる複模ではない。但し本文の內容や順序等は全くかはらない。明治初期の京都の出版史を調べる上からは、これらの二版の發行者又發行所を取調べたいのであるが、私も未だそこまで及ばずにゐる次第である。

話が元へ回るが、序詞と前田香雪の解說とに由れば、最初の大久保夢遊單行本は、初め日下部鳴鶴の所藏本三軸に依つたと云ふことである。然るに鳴鶴が大正十一年一月に歿（八十五）してから程なく、遺藏品の賣立中に該三軸があつて、それを佐佐木信綱氏が購入されたのを私は翌十二年四月に初見した。昭和三年七月京都に於ける伊曾保東西諸本

の展觀にもそれを借用し今現に參照しつゝもあるのである。箱書には立甫筆三卷とある。幅一尺八分ほどの大本であるが、それは幕末以來有名になつてゐる珍書なのである。

明治の末年に大阪で宮武外骨翁が編輯發行された『此花』といふ浮世繪の雜誌の明治四十三年四月一日發行の第四枝に於て大槻如電翁が「伊曾保物語のものがたり」と題して劈頭左の思出話をされたことがある。

エ、先年岩谷一六さんの所へ遊びにまゐりました時に大卓子の上に太い卷物が三本ありましたから、あれは何ですかと聞きましたら、あれは珍品ぢや、ごらんなさい、と云はれましたから、披いて見ると、何ぞ計らん、伊曾保物語の繪卷物で、其筆者は書畫共に雛屋立圃であつた、是は珍物ぢや名卷ぢやと賞翫して、何人の所有なりやと問ふたら、賣物だが直段が高いからどうしようかと考へ中だと答へられた、自身も欲しいには欲しかつたが、岩谷君が先口であるのに、其上ねじるしも高いと聞いて忽卒に見をさめて、一六さんの所有になつたら、重ねて見られると思ひ、さのみはと圖柄畫樣にも意を留めなんだ。其後程へて一六先生に或處で御目に懸つた、忘れもしないか

ら、先月の伊曾保の繪卷は御手に入りましたかと聞くと、値が高いから手に負へないで、殘念ながら返したと云はれた、此方も殘念であつた。此繪卷は其以後眼にもふれず耳にも入らない、誰からの話しも傳へないから、定めし外國人の手に入つたものと思はれる。

斯う如電翁は述懷されたが、それを見られたのは明治何年頃のことだか記るしてもなく、私は翁には何度となく談話をきゝながら未だその年代を聞き及ばずにゐる。岩谷一六翁は明治三十八年歿（七十一）せられたのだが、如電翁の一見されたのは、既に日下部鳴鶴翁の手に歸してゐた明治十七八年以前の事にちがひない。前田香雪翁の解說中には、その日下部本の三軸には繪が有るとも無いとも記るしてないが、何とも一言してない所を見ると、蓋しその時には最早詞書すなはち本文だけで、繪は切られてあつたのではあるまいかと思はれる。

今佐佐木氏の現藏によつて見ると、紙面を切斷して繼合はせたらしい形蹟が處々に殘るばかりでなく、慶元系古版本の上卷全部と中卷の首十四話とが削除され、古版本の上

中下三卷と卷軸寫本の上中下三軸とは全く齟齬してゐることを發見する。卽ち卷軸本の上軸は古版本中卷の第十四話より以下の十六話と古版本下卷の第一話以下の首三話とを加へた合計十九話より成り、卷軸本の中軸は古版本の下卷の第二十一話以下第三十四話の大尾に至る十四話より成り、下軸には古版本下卷の第四話以下第二十話に至る十七話を收めてある。卽ち中軸と下軸とが入れちがひに題書されてゐるわけである。これは畫を切取つた後の人の粗漏から出たにちがひない。それはそれで題書の過失として見逃がせるが、現存三軸の繼目の怪しく不規則なことは、繪の曾て存在したことを暗示してゐる。それらの錯簡をこゝで委細に點檢することは煩を厭うて省くことにする。他日別な場所で試みたいと思つてゐる。

大久保本には卷軸本の中軸第十三話すなはち古版本下卷第三十三話にあたる「三人よき中の事」を省き、下軸の第二第五第七第八第十一第十三第十七の七話を省いてある。それは古版本下卷の第五第八第十第十一第十四第十六第二十の七話にあたる。卽ち古版本の中下兩卷にわたる本文六十四話を、現存古寫三軸本には五十話を取つて古版本中卷

の首十四話を捨てゝあるが、大久保本には更にあちこち八話を削除して、五十話中の四十二話にしてしまつたわけである。

前に書洩したが、岡本保孝の自筆なる況齋雜記といふ本が災前の東京大學國語研究室にあつた。それに左の如く著錄してあつたのを覺えてゐる。尙又幸にも此書の複本は京都大學圖書館にとつておいてある。

伊曾保物語　三軸

コレハ西洋人ノカケルヲ譯シタルモノ也、三百年前ノモノ也、活字アリ印本アリ、亡友太田全齋ノ藏ナルハ軸ニ五三桐アリ。

この軸に五三桐ある本は佐佐木氏現藏のもので、卽ち日下部氏舊藏本である。前田香雪翁の解說にも見える如くである。岡本況齋は明治十一年八十二歳を以て歿した舊幕臣の考證學者である。

太田全齋は福山藩士の音韻學者であつたが、文政十二年その歿時には、況齋は三十三歳であつた。全齋歿後明治十有餘年に至る五十年間、この卷軸本は何人の手に存したか

は固よりわからない。況齋がこの事を錄した年代も亦不明である。

明治十九年の春陽堂版の一小冊子の由緒來歴は右のとほり中々おもしろい。然し謎はまだ〳〵殘る。（昭和五年二月二日稿）

（「愛書趣味」昭和五年五月）

續日本隨筆索引

緣の下の力持をして第一に算へあげられなければならないのは索引の編纂と印刷との仕事であらう。一般の辭書にしても百科辭典にしても或はまた古事類苑や廣文庫などのやうな東洋獨特の類書にしても國書解題をはじめ幾多の書目書誌にしても、すべてそれらの便利な書物の著者となると、多くの場合にその名前と功勞とが犧牲になつてしまひ、緣の下の力持となつてしまふ。然し索引の編者になると我々をして一層その感を深うせしめるのである。

著者が各々の論文を仕上げた後において常に必ずしも一々參考書名を擧げるわけにもゆかぬから、前記の辭書類の書名を掲げて、その編者に感謝することが出來ない場合が多いのは自然だが、殊に索引の編者に對しては、心ある人々は內々その勞を認識し感謝の情切であつたにしたところで、つい一言もせずに濟ます場合が常である。誠に以て濟

まぬ次第であるが、事情またやむを得ぬと思ふ。從つて多くの著者は、索引の編者に向つて何かの機會において感銘の念を發露して然るべきだと信ずる。

この意味において、私は多年太田爲三郎翁に向つて蔭ながらその功勞の多大なるを認め、その獻身的事業に對して、多くの著述家協同して何等かの表彰法を講じて上げてもよいと感ずるものである。一寸した書物に對しても同志友人相こぞつて出版祝賀會を開く世の中において、明治三十四年の大日本隨筆索引、大正十五年增補版の日本隨筆索引、さて今般出版の續日本隨筆索引、これら三回にわたる、計り知るべからざる煩瑣な仕事の達成について、私たち多大な便益を享受してゐる學徒は、太田翁に對して如何なる記念會、如何なる表彰會を催しても尙足らない心地がされるのである。

明治卅四年の初刊本は、隨筆の收錄百六十四種七百三十九卷に過ぎなかつたのが、大正十五年の增補本においては、種類において五十種を增して二百十四種千百六十卷に達し、十有餘年間に新刊の隨筆を收錄して一層研究家や著述家を益して居たのであつた。然るに今度思ひもかけず新刊された續日本隨筆索引になると、我々は更に百七十八種八

百六十一卷の隨筆の索引を加へ與へられたのである。三段組八〇五頁の正篇の外に、新に續篇八九五頁の一大索引書を座右の寶典とすることが出來たのである。

三期にわたつて續刊せる日本隨筆大成、藝苑叢書、未刊隨筆百種、有朋堂文庫隨筆集、近世風俗見聞集、懷德堂遺書、三十輻、その他を併せて十種ほどの隨筆叢書を加へて、前刊の正篇と同じ體裁を以て、主要なる標語の索引が編まれてゐるのである。收錄書目が卷頭についてゐることも又同じであるが、そこにはまづ書名と著者名と卷數と發行年代とを揭げた後に、索引本文における略符號と所收の叢書名を付載せる備考欄とが、その下位に記入してある。この順序は前例を追うたに過ぎぬが、寧ろ隨筆書名の略符號を一番上に揭出した方が便利になりはしないかと思はれる。

發行年代の欄は、明治以後の新刊又は再刊を記入してあるのだが、むしろ原著の述作乃至出版年代を錄し、又著者の歿年でも小さく付載する方が便宜ではあるまいか。隨筆又は隨筆所收叢書の新刊年代は、むしろこの次の參考になるだけであらう。欲を申さば別に隨筆目錄とでもいふものを添へて下さらば、愈々好都合であらうなどと勿體ない樣

日本文學大辭典

現代における創作や飜譯や評論の隆盛なことは特にいふを要せぬが、過去に遡つてまづ明治以降の新文學に對する研究のめざましさは固よりのこと、江戸文學の範圍にしても、中世中古の文學の領域にしても、資料の發見校勘、語句の解釋考證、書誌となく叢書となく、或は講說に或は刊行に、深き精緻な檢討も、廣く知識の普及も、今や日本精神の自覺に伴ひて益々進展して到る所を知らぬばかりである。基礎的乃至補助的な學問より參考的乃至對照的な資料にいたるまで、新古の日本文學の探究に向つて聲援を與ふる知識が多々あることは、今日の學問界にあつては當然すぎるくらゐ當然である。かくの如くして日本文學大辭典の編纂の機運は作られ、從つてその需要の絕大なるべきことは想定されねばならない。

このことは日本文學の上ばかりでなく、日本國語の上にも同樣にいはれる。國語の文

な勝手な希望を抱くものの、實はもうあれだけでも難有さに涙こぼるゝ次第である。

少々勝手な注文ながら一言申し上げておく。日本隨筆全集十九冊には索引を一冊つけてあるが、その全集中にもこの續隨筆索引に容れるべき隨筆がありさうであるし、尙そのほか珍書百種、隨筆大觀等の中にも編入收錄すべきものが若干殘つて居ようと思ふ。もつとも編者太田翁は一まづあの邊で打切つて、續々隨筆索引の編纂を他年に期してをられる樣である。我々は重ねて編者の勞苦を感謝すると共に、謹んで翁の健康を祈るものである。最後に我々は印刷も厄介であり、賣行も懸念される所のこの種良著の出版を不況時代に敢行した岩波書店の大奮發を稱揚する義務もあると信ずる。

（「東京朝日新聞」昭和七年十二月三日）

獻資料ばかりでなく、方言資料にしても、近隣諸言語或は同系言語の探尋にしても、今日すでに一應の歸趨を見るに至つたともいはばいへる。これは日本文學大辭典のうちに日本言語文學の史的研究の業績を縱横無盡に收錄した所以であらう。されば本書は名は日本文學大辭典といつても、實は言語に關する事項をも網羅してをり、日本文學語學大辭典と稱して毫も差支ないのである。

かくの如く本辭典は、時代から觀ると、上古中古の國文國語より中世近世の國文國語を經て新代現代の日本文學言語に及び、地域から云ふと、鄕土文學や方言俚歌をも尊重し、遡源して支那や印度の言語文字文學に關する紹介にもわたり、更に琉球、朝鮮、アイヌの言語文學の知識を提供し、進んでは歐洲の文學言語との關係や影響についての概說をも收めてあるやうな懇切が到る所に盡されてゐる。

之を要するに本辭典は、時代も地域も範圍も廣汎かつ周到であつて、文學者語學者または創作家評論家、さてはこのがはの研究家の傳記と作品、著者と研究書目とを掲げた人名辭書でもあり、また新古の作品著述の解題書目でもあり、且つ文學語學の主要なる

專門用語を說明した術語辭典でもある。

書誌としては、古い作品や文學語學の書物ばかりでなく、明治以降の文壇に著名であつた雜誌名を、例へば文學界・しがらみ草紙・早稻田文學・帝國文學・三田文學・白樺・明星・スバルなど云つた樣に滿遍なく公平に登載して一々篤實な解題や年次卷數を著錄してゐる。古くは少年園・小國民より赤い鳥などの幼少年雜誌にも及んだ。文學の種類としては、例へばアイヌ文學・琉球文學また五山文學・吉利支丹文學などの傍系文學をも蔑視することなく、別に支那文學の影響とかフランス文學の影響とかいふ項目をも標示してある。これら各般の人名書名件名より特殊の文藝學的乃至言語學的術語などの標出は、かなり微細であり精到を極めてをり、檢索が便利に出來てゐる。

各項目の敍述は、それぞれ專門家の分擔として而も豫め分量の制限が守られた樣だから、概して繁簡よろしきを得てをる。萬葉集や源氏物語の如きが非常に多くのページ數を占めてゐるのは當然であり、明治國語學の名著に言海や廣日本文典を忘れなかつたのも大に嬉しい。たゞサトー・アストン・チャンブレンを擧げてフローレンツを逸したの

は容るされるとしても、大槻文彦や大矢透を漏らしたのは、或は歿年の新しきためであらうが頗る遺憾である。

金澤文庫の近狀近業は事あまりに新しきを以て、舊事の記述にとゞめたのは止むを得ぬが、書籍目錄や書誌學の項目のほか圖書館の名目を專載して欲しかつた。かういふ樣な我田引水に陷る物足らなさは、他方面にも強ひて求めればあるかも知れないが、いづれも言ふに足らぬ微瑕にすぎない。口語歌・口語文はあつて、言文一致といふ標題だけなりと參照を掲げても無用ではないであらう。

尙前田松雲公の名も錄しておきたかつたと思ふ。インドヨーロッパ語族のことだのをもつと大に節約すると、假りにウラルアルタイ語族のことはあの位にしておいても、尙短縮し得る紙面をもつて、新たに補充し得る項目がないではなかつたらうと信ずる。但しこれらは極々稀有な遺漏や不備であることは敢て斷る必要もない。

本書が藤村作博士の統制編纂に基き、かつ橋本進吉博士その他われらが敬畏する幾多俊秀の專門學者の輔翼や分擔に由りてかくの如き日本無比とも未曾有ともいふべき大業

の完成したのは、誠に昭代の盛事である。昭和七年六月初卷を出してより滿二ケ年を經て首尾よく三卷を刊了したのであるが、毎卷千一二百頁の大冊、四段二十字三十四行の細密なる容量、多數の鮮明なる挿繪と圖表とを備へ、歐米諸國に對しても、遜色なき內容の文學大辭典たることは、斷然保證し得る。蓋しこの種の辭典としては、現今世界で僅に三四種を出でざるその中の一に入るべきものだといふを憚らない。

（昭和九年九月十八日）

平凡社の大辭典第一卷を讀む

型に捉はれないことは、とにかく進歩の表象である。型を破ることは、殊に我々學徒には難事である。平凡社の大辭典二十四卷が、いまその雄偉なる第一歩を履み出したのを見て、この感を懷くことが深い。聰明なる世間はすでにこの非凡なる大辭典に對して妥當なる判斷を下してゐると思はれるのに、私がここに無用な註脚を施すのは、それこそ蛇足であらう。

初め私が大辭典のプランを聞いた時は私が多年抱いてゐた日本語の大辭書の夢想が實現せられる好機運がほのほのきざしたやうな感じをもつたのであつた。姑く範を英語の大辭書に取るならば、オックスフォードの大辭書すなはちNEDまたの名OEDの陳呉とも譽めたら譽めてよかりさうな型の國語辭書が計畫されたのかと思つた。いふまでもなくそれは世界の大辭書の定型に捉はれてゐた考へであつた。

むろん牛津の新英辭典が編纂數十年にわたり印刷また四十年に及ぶ巧遲なスローモーションで完成したのに反して、平凡社の大辭典二十四冊が而もその冊數を倍加しながらそれで二十分の一にも當らぬ二箇年くらゐの短い間に編纂と印刷とを完了せんとする破天荒な企ては、さすがにスピードを主とする現代の所產だけあると感歎せざるを得なかつた。從つて拙速に陷ることを出來るだけ避けていつたなら、豫期よりも早くNED式の國語大辭書が實現する機運が近づいたのであらうかと想像したのであつた。

しかし平凡社の創意による大辭典は全く世界の大辭書の型を打破した所の一の新型であつた。私らが捉はれてゐた型を超越してしまつたのである。在來の國語大辭典と在來の百科大辭典と在來の各種特種辭典とを綜合して打つて一團とした展望の廣い而も平明簡潔を極めた新型の大辭書であつた。深さにおいてはともかく、廣さにおいては、世界の一切の辭書を超克してゐる。日本の一切の辭書は及びもつかない。語原的ではない。沿革的ではない。比較的ではない。しかし煩瑣な學究的記述と說明とから脫して、平明簡易な敍述を以て國語界に於ける一切の事象を網羅し盡してあます所なきやうに努めて

ゐる。この網羅式態度は、あらゆる方面にわたつて貫徹せんと欲してゐる。時代の新古、階級の高下、外來の古今、何らの差別を設けない。都鄙の區劃、標準語、方言の差等、一般語專門語の境界、そこに强ひて明確な線を引かない。すなはち言語現象を一切平等に觀じ來つて、地名であれ人名であれ、對等に收容して索出者に最大の便利を與へたのが本辭典の一大特色をなす。この特徴は日本に在つても近來ますます採用されて來た傾向であり、商業界に於ける百貨店式な設備に髣髴してゐるが、この特徴を最大限度まで伸展させたのが、今度の平凡社大辭典である。まさに新時代の產物にほかならない。

從つて諸種の專門學者からは相當の批評を受けるには違ひなく、とりわけ國語學の專門家または國語辭書の專業者からは嚴肅な論難を蒙むるかも知れない。然しながら、平凡の裡に非凡を求め、非凡の間に平凡を採つた所が本辭典編纂の基調である。又一方には本辭典の傳統は、實に中世以降の伊呂波字類抄や節用集の如き通俗大中小辭書の範を廣汎に現代風に發展させたものと見ることが出來るのである。ただそれら舊式の辭書がイロハ順をとつて各々の文字のうちを分類式に列べて、讀み方によつて字形を授けるの

を主にしたのに對して、これは一切近代的な五十音順に次第して、分類式の羅列をこそ棄てたが、各種の語類を集大成した主義は正にその揆を一にしてゐると言ふべきである。規範的な態度をとらずにむしろ一層廣汎な記載的說明的な態度をとつた所は、新時代の要求の現はれとすべきである。

かういふ忠實な網羅式な態度は、なまじ偏狹な選擇的な態度よりも、將來の純粹な國語大辭書の編纂に向つて、有益な資料を供給し得るといふ點において、辭書の專門家にも歡迎さるべき性質のものである。國語學者に對してもいろいろの便宜を與へ恰好の目安を示し、棄てがたき重寶な辭書を授けたわけになる。本辭典は必ずしも國民一般の無二の大辭典としてのみ終止すべきでなく、かかる意味において私ら專門の學徒にとつても敎示するところが多大であることはいふまでもない。

標出語の綴りをすべて發音的にした英斷も、在來の大辭書の型を破つた試みとして注意し驚歎される。その標目もすべて片假名にしてある。むろん表音式の下には歷史的に正しき假名遣を平假名で振りがなにして漢字をあてた。これも簡便にし平易を期した爲

である。挿繪も鮮明であるが、第一卷では舊代の風俗に關するものよりも動植物の方に多いのが目につく。アクセント符を處々要部に加へたのも一の異彩である。

之を要するに、今度の大辭典は諸般の點において新機軸を出したものであつて、第一に標目が細密であつて、索出上の都合が最も良く、通俗の裡に特殊を見出すことが出來、百科事彙や地名人名書名の辭書や專門辭典を兼具してゐる點において、一の新型を作つたものである。成句俚諺をも一標目として掲出したのも便利であらう。論理よりも達意、分析よりも綜合、部分的精緻よりも全般的細密、深遠よりも廣汎、煩雜よりも簡易、高尚よりも平明、これらの諸點を採つたこと、以て本辭典の長所となすことは敢て私の指摘するまでもない所であらう。放膽な、中庸な、一見相矛盾したやうな點を結びつけた趣のあるこの實際的な大辭典が、世間に無數の知己を見出すことは疑なからうが、希くは前途に横はる非常時を突破して最終の成功を收むること、なほ英國の大辭書出版の時の如くならんことを望む次第である。

（「大辭典月報」第二號昭和九年八月十日）

修訂大日本國語辭典

上田松井兩博士の大日本國語辭典は、大槻博士の大言海と共に、完全なる皇國語大辭典の雙璧をなすものとして著名である。博洽を期し浩瀚を企圖せる大辭典を他に求めようとすれば、一二それを指摘することが出來ようが、正確にして信憑するに足り以て一世の典據たるべきものと言へば、如何にしてもこの兩辭書を擧げるの外はないのである。但し、永年これら先進諸家の學德を仰ぎ、また居常これら兩辭書に資益する所極めて多き自分としては、僭越にも二書を軒輊し得ようとは夢にも思つてゐない。畢竟、二書は兄たり難く弟たり難しと申すのが穩當であらうが、二者おのおの特長の顯著なるものを有し、互に相補翼すべきものが少くないことは、既に利用者周知の事實であり、學界の定論である。而も國語辭書の大宗師たりし舊言海の光被が普及し盡くすと共に、國語學の進運に伴ひ新時代の要求に促がされて、編纂出版されたのが即ち大日本國語辭典の四

大冊であつたことに、明治三十年代の中葉より大正年代の初期にわたる十數年間、私自身の國語學修養時代において、その著者たる兩先輩に親炙した經驗として私の直接知悉した所である。要するに、舊言海の普及性と優先性との窮達した結果として刊行されるに至つた大日本國語辭典は、爾來その權威を昂揚しつゝ、而も新に大言海の編輯に際しても、隱然一の典據となつて素材上寄與する所の尠少でなかつたことは、識者の認めないわけにはゆかぬ所である。

以上は明治以降の國語辭典の史的觀察からする公平な判斷であるが、私は明治晩季に遇好くも國語學淵叢の裡に長じて上田・大槻・芳賀・松井諸博士の提撕と惠澤とを被むり、幸にも、特に大日本國語辭典編纂初期には、松井博士私邸における編纂室に時々出入して其の豐富なる資料を目睹する機會を與へられ、上田博士よりは、或は東京帝國大學の國語研究室に在りて、或は文部省の國語調査委員會に在りて、屢々該辭典の指導原理と編纂方針とに關して披瀝せられた所を傾聽した三十有餘年前の思出がある。この思出は、大槻博士他界後に於て、中途より大言海の修補を翼輔した私の近年の經驗に比し

て、抑もこちらが壯年の學修時代であつた丈、印象が更に深いばかりでなく、之を歲月の上よりして、私の書齋裡における利用と請益とが長期に上り周密に及んでゐる事情もあつて、大日本國語辭典の長所を認識する點の方が割合に多い事は、私が腹藏なく申し得るところである。尤もこれは部分部分の相對的價値について云ひ得るのであつて、全體の究竟的斷定に至つては、苟且に下すべきでないのは勿論である。

先づ語彙の採擇に關して、大日本國語辭典は、極めて妥當であつて、その蒐集法が不偏公平である。然し、實質上の著者松井博士が、もと古典學者にして中古中世の文學と故實とに造詣の深い關係から、前刊四冊本が殊に上古中古中世の語彙に富み、その語釋が簡潔適切、加ふるに擧例出典の懇篤な點が先づ第一に敬服されるのである。これは本邦の國語辭典の發達史上直ちに首肯される所であるが、併しながら著者は近世文學に取材した近世語彙に對しても決して疏遠ではなかつた。今度增補の二冊には、往古の語彙を補遺する外に、近古近世の語彙に向つて、一大進展を見るに至る由である。恂に心强きことである。明治以後の新語についても、舊刊四冊本に含有する所、並びに解釋說明

せられた所、亦取捨宜しきを得、的確旨に叶つてゐたが、今次の分は進んで現代時流語の生命あるものを採錄して時代の要求を充たさんとしてゐる。著者が語原の解釋の不安なるに鑑みて大抵之を割愛したのは、大言海の特徴と正に相反する所であるが、私は著者の果斷と見識とを認めるに躊躇しない。一方より云へば、これ亦本辭書の堅實味と穩健性とが推稱せらるべき所以でもある。次に、著者松井博士は、文法學者を以て目されてゐる專門家ではないけれども、本辭書における文法的說明には敬重されるものが頗る多い。方言卑語の採否に關しても、著者一隻眼を具し、敢て輕々しく之が編入を容るさなかつた一事の如き、要は著者が本書をして大日本の標準國語辭典たらしめようと云ふ根本方針から出たものと解せられる。

前刊四冊を五冊に改訂せられて利用上の便宜が講ぜられるのは、有難いことであるが、單にかゝる外形上の發展ばかりでなく、既刊本の實質に至つても、印刷の技術の容るす限り、殆ど每頁に修訂を施し、時に增補を試み、大に面目を新にした概あるが如きは、著者及び發行者の學問的良心の反映であつて、學界出版界の慶幸とせねばならぬ。況んや、進んで增補版二大冊を編刊して更に昭代の奎運に貢獻せんとするの意氣の益々壯とすべきものあるに於てをや。私は松井老翁の愈々健勝ならんことを祈ると同時に、坂本新社長の盡瘁を多としつゝ蕪辭を結ぶことにする。（昭和十四年九月稿）

大言海

大槻博士の言海刊行せられしより玆に四十有餘年、その惠澤に浴せるもの蓋し限りなかるべし。ひとり國語の研究と國文の解釋とに從事する者のみならず、諸科の學徒、一般の讀書子、國語の語詞につきて、その意義その用字その起源その沿革その用例を知らんと欲する者、廣汎にして而も簡素、正確にして以て信憑すべき辭書を求めて、誰か言海を擧げ言海を用ゐざりし者あらんや。言海以來現はれし所の大小幾多の辭書、もとより進歩の蹟さばかり顯著なるものありとは云へ、いかなる辭書か、敢て言海に負ふところ少しとせんや。即ち言海世に現はれてより言辭の學大に進むと稱すべし。

本邦にありてかかる劃期的大辭典たる言海の刊行が完了したりし明治二十四年のころは、十九世紀の末期に方り、恰も歐米諸國に於ても大辭書の陸續世に現はれ、世界の辭書史中にても光彩盛なりし年代に屬せり。即ち大辭書の出現は東西正にその機運を同じ

うせしものと云ふべきなり。案ずるに、ウェブスターの名辭書に後るること六十年、グリムの獨逸辭書の初刊を隔つること四十年、リットレの佛語辭書の刊了を去ること二十年、大槻博士の言海は世に出でしものなるが、顧みれば、著名なるマレーが新英辭典の創刊は、言海初刊第一冊の前年に現はれ、米國に於てはウェブスターの改訂第三版の大冊、スタンダード辭典の巨冊、センチュリー辭書の十二大冊、いづれも皆この言海刊行年間の前後に出でたり。語源辭書にありては、英のスキートの著、獨のクルーゲの作、共に言海を遡ること十年内外なり。かくの如き幾多の辭書、刊行の年數、編纂の歳月、協力の多少、自力の程度、規模の廣狹、成果の優劣、元より種々異同あるを免れずと云へども、言海初刊の際における本邦辭書界の幼稚なりし有樣を思へば、かくの如き歐米幾多の名辭書がそれぞれ自他の國國に於て擧げたりし功績に比例して、言海が我が國語界と讀書界とに與へし偉大なる影響は決して遜色あるものにあらざるを知るなり。

今や故博士が二十年間の偉業たる大言海世に出でんとす。その間、編纂の辛勞に關しては博士手記の苦心談の本書に添ふあり、以てその一斑を窺ふに足るべく、或は既に、

識者の洩れ聞きて知悉する所少しとせざれども、予輩をして獨のグリム、佛のリットレ、共にその精力の老博士に及ばざりしものあるを想はしめずんばあらざるなり。マレー等の新英辭典が立案後三十年にしてその初冊を刊し、爾後四十年にして昭和三年西紀一九二八年を以て漸く十卷十二大冊を刊了し、その精到に於て古今に絶し東西に冠たるの概あるは、固より協心戮力の程度同一の談にあらざれば、或は以て論外となすべからんも、大言海の四大冊が實質に於て編者が殆ど獨自の努力に成りし業績なるを思へば予輩はその精根その氣魄に對して敬仰の念更に大ならざるを得ざるなり。

大言海が語源の考究に力を盡ししことは、亦著者の苦心談中に詳にせり、別に予の贅言を要せざる所とす。語源考につきて著者獨創の確說の以て後世の典據とすべきもの頗る多きは亦說くを須ゐず。これらの卓越せる點につきて、言海が過去四十有餘年の間、我が國語界、讀書界に光明を放ちたりしが如く、大言海が向後永く學術界の指針を供すべきこと固より疑を容れざるなり。

更に回顧すれば、言海出版完了の翌年なる明治二十五年、予は中學の課程を卒へて高

等の學校に進みしが、そのころ此の辭書を父より買ひ與へられし予の喜びは譬ふるに物なかりしを覺ゆ。後年同じ著者の廣日本文典の發刊直後これを購ひて熟讀せしは、予が大學に入りて言語の學に志して一年生のをりなりしが、言海を繙きし際の嬉しさはそれにも勝りたりき。さて、これよりは五年の後、かれよりは十年の後、明治三十五年以降數年の間、初度の國語調査委員會に在りて、予がかの言海、この廣日本文典の著者として多年景仰したりし老博士に親炙するに至りしは、三十歳未滿の一青年として感激の情なき能はざりしなり。今にして三十年前の昔を憶へば、當年の博士が風貌眼前に髣髴たるものあり。更に遡りてはその舊著たる外來語原考を讀み、新に和蘭字典文典の譯述起原に關する講演を聽き、予が青年期に於て少からざる裨益を得しことは言ふに及ばず、程經て國語の語源に關する博士後年の論說を參考するに至れる頃には、予も亦いつしか語源語史の考證に親しみ、普く東西の辭書の上に興味を感ずること深きに及びぬ。從ひて、昭和三年の春、博士の他界せられしや、予が亦多年親炙して蘭學史料の見聞に請益する所少からざりし令兄如電翁の囑に由りて、故關根正直博士に附贈して、大言海印刷

の擧に參與して敢て微力を加ふるに至りしも、因緣決して淺近なりとせざるなり。且つ予今年渡歐の際、我邦將來の國語大辭典編纂の大擧に備へんと欲し、先づ新英辭典の來歷を稽査したりしに、歸朝の後幾ばくもあらずして大言海初冊刊行の盛運に遭ひたるは亦遇然なりとせず。夫れかくの如く奇しき因緣の重なるを感ず、是れ予輩の敢て僭越を顧みず、畏敬せる先覺者の大著に對して蕪文を序する所以なり。即ち一は以て國語界と讀書界との爲に此の大辭典の刊行を慶讃し、一は以て予輩後進學徒の奮勵を期せんとするなり。

大言海が著者獨自の力に成れるところ、獨創の考究に由れるところ最も多きこと前述の如しと云へども、令嗣茂雄君の後語にも見ゆべきが如く、尙ほ編輯を補助せし少數の人々なかりしにあらざるなり。就中予輩の特筆せざるべからざるは、大久保初男翁が、四十年前の昔、舊刊の言海の編輯及び校正に參加せられし閱歷と七十に垂んとする老齡とを以て、更に今刊の大言海の編纂補助竝に印刷校正に終始殆ど一貫して盡瘁し、尙ほ引續きて不斷の努力を加へられつつあることにして、予輩この涙ぐましき辛勞に對して、

多大なる敬意を表せざるを得ず。（昭和七年十月二十三日）

日本文庫史

本邦の文庫史の研究については、江戸時代以降、學者の手をつけたものが少々は存するけれども、古代より近代に及ぶまでの日本文庫通史ともいふべき綜合的研究が闕けてゐたのは、斯道の人々の私かに遺憾としてゐたところであつた。例へば昭和年間、森潤三郎氏の紅葉山文庫と書物奉行に關する研鑽、關靖氏の金澤文庫の終始と舊藏本書誌に關する業績、いづれも當代における文庫史上の一大成果といふべきである。竹林熊彦氏の明治時代の圖書館史の如きは、未だ一大冊をこそ成さないが、たしかに注目すべき調査であつて、前記兩文庫の沿革誌と共に、私どもが大に多としたやうな仕事であつたのである。

然るに、我國の古今を通じて、朝野、公武、社寺、諸藩、學校、學者すべてにわたつての文庫史の概括的研究を試みたものは、未だ曾て一冊も世に現はれなかつた。尤も、

之を學術史籍に求め、之を百科辭典に採るならば、文庫史に關する多少の記が無いではなかつた。又之を專門の學術雜誌と古新聞紙の學藝欄とに博搜するならば、往々にして簡單なる文庫史が眼に觸れもするのである。古くは萩野由之氏の文庫考や藤岡繼平氏の文庫の歷史等の如き舊稿をはじめ、明治末年より大正初年にかけては、森潤三郎氏の發表なども其折々の顯著な業績として今も私どもの記憶に殘る。中根肅治氏の稿本といひ、和田萬吉氏の雜纂といひ、中には未刊行未發表のものもあらうが、私どもの壯時に方つて後進の學徒を益したことが少くなかつたことを感ずる。況んや個々の文庫史料に關しては、その考究決して稀でなく、その發表亦頗る多かつたやうに思ふ。

いま小野則秋君の新著日本文庫史を、その稿本と目次とに由つて概觀するに、斯界における從來の一大闕典を充たし、我國上代より大正時代に及ぶ諸時代の各種文庫の史的敍述、極めて周到にして精緻、而も簡明にして要を得、單純なる羅列式に陷ることなく、煩瑣なる史料の編輯に終ることなく、優に卓拔なる識見を以て、多年蘊蓄にかゝる文庫史料を驅使して、一大冊を編まるるに至つたことを知り、私は學界のために慶祝せざる

を得ない。著者小野君が數年まへ九州より京都に移つて同志社大學の圖書館を主幹せられてから以來、私は同君の來訪を受けて君が積年の造詣にかゝる日本文庫史の諸篇諸章節を、提示說明せられたことが何回にも及んだ。且つそれらの部分的業績の發表があるる毎に、君よりその拔刷を惠送せられて、私は之を讀んで大に興味を惹かれてゐた。顧みるに私も明治の末年から大正の初期にかけて、聊か日本文庫史を概觀し、時にはこれを講述し、時にはこれを公刊したりしたやうな興味を既に持つてゐたからである。石上宅嗣の芸亭の顯彰の如きはその成果に外ならなかつた。又古寺の經藏や輪藏を調べはじめたりしたが、それも中絶してしまつたやうないきさつもある。近くは、陽明文庫をば、一の文庫として史的考察を始めて未だ進まざる有樣にもある。自身のさういふ經驗からして、私は著者に對しては、深くその苦心に同情し、屢々その興趣に同感し、大にその業績に嘆服せざるを得ぬわけである。

更に一例を加へるならば、以前に私は嵯峨天皇以來の冷然院の沿革を調査して、文館詞林の始末を考究し、日本國見在書目の檢討にも及んで、今なほ完成を遂げずにゐるやうな次第である。實は今日洛西大覺寺における嵯峨天皇の一千一百年の聖諱に參拜するの光榮に浴し、心經殿內の御尊影を奉拜するの幸を荷うた後、歸宅したところ、著者より再び本書の序文の需めを受けたので、直に冷然院祕閣を想起しつゝ、遽かに筆を走らせて、此の蕪文を綴つて序とすることになつた。試に難有き因緣と申さなければならない。

昭和十七年八月二十八日

（昭和十七年十月刊小野則秋著「日本文庫史」序）

日本藏書印考

曩に『日本文庫史』の著述を世に送つて、文化史料また學術史料として本邦の學界に闕けてゐた所のものを充し、且つ書誌學界にも裨益すること多大であつた同志社大學圖書館の小野則秋君は、このたび更に『日本藏書印考』の新著を公刊されるに至つた。從來、本邦に在つても、學藝諸家の印譜は、近世に及んで往々現はれてをり、藏書印譜の編輯刊行も明治以降をりをり試みられなかつたのではないが、然し藏書印について學問的考察を下だし、その諸相を闡明して、以て書誌學者および藏書家愛書家の參考に資するやうな成果を擧げたことは、是まで殆ど絶無に近いと申してよいのではなからうか。然るところ小野君は、この點においても、再び先鞭を着けんと欲して、古今藏書印の種種相を剖析し、その稽査と鑑定とにも亙つて、自家の蘊蓄と、鑑識の迹を世に問はるることになつたのは、斯道のために誠に慶幸とせざるを得ない。卽ち本書が、圖書館員・

書誌學者・一般藏書家、乃至は古書業者をも益すべきは勿論のこと、私の如き老閑人の趣味をも充してくれることを期待するあまりに、私は又もや著者の懇囑に甘えて敢て冗漫の辭を綴ることになつてしまつた。自分も家傳の古い藏書印や少壯時所製の二三の藏書印をば、近頃は新刊雜書の扉面などに押し押し、いろいろな迷ひとさまざまな思ひを繰返し、或は朱肉の濃淡厚薄を危ぶみ、或は位置の高低左右に惑ひ、或は一曲一直に喜憂するなど、多少の小苦樂を經驗しつつある矢先きではあり、また時として數ならぬ自家所有の古書の上の舊藏書印に見入つては、嘆服敬慕の微笑をもらすこともないではないから、本書の出現を期待する情も亦頗る多大ならざるを得ぬのである。

昭和十八年六月一日夜

（昭和十八年七月刊「日本藏書印考」序文）

金澤文庫叢書の發刊

昭和の聖代において舊文庫の復興整理を遂けた中に、金澤文庫の場合のごとき顯著な例は、他に全くあるまい。

明治以降における奈良の正倉院乃至聖語藏の御整理、大正年代における京都の　東山御文庫の御調査、是等比倫を絶した場合は申すもかしこしであるが、つゞいては宮內省の圖書寮、それと關係深き內閣文庫、それらが江戸幕府の紅葉山文庫を源流に含む點に於て、明治の文庫史上に著名な收藏をなしてゐることも亦說くをまたない。之を公家にしては近衞家の陽明文庫、之を武家にしては德川三家の文庫さては賀州の尊經閣文庫のごとき、それら諸文庫のうち一二の場合を除いて、多くは目錄圖錄やうの刊行を見たくらゐ既に皆整頓の域に達してゐる。關東にしては、足利學校の文庫のやうに德川時代より夙に保存利用の道が講ぜられて既に戰國時代の兵火をも散逸をも免かれてゐた幸福な

場合もあるのであるが、明治に至つてそれが割合早く復興の機運を得た。關西にしては京都奈良高野等の寺院の文庫が着々その復舊とその整理とを見るに至つたことも、一々指摘するまでもなく、明治後期このかた種々の來歷を閱みしてゐることである。

然るに、金澤文庫のごときは、創立以來二百年にして一たび上杉憲實が中興の業をおこしたと稱せられるにも拘はらず、更に百有餘年にして北條氏政が小田原より手を文庫に伸ばせるあり、且つ數十年を下つては豐臣秀次が稀籍を京洛の地に略奪分與せるあり、尋いで德川家康が有數のものを官庫に移管せるあり、その他戰亂時代において目にみえぬ散逸は固より知ることが出來ないのであるが、太平時代にはまた幾多の好書家がいつしか善本を取出して行くへの判らなくなつてしまつたものが數少からずあつた。明治以後にあつても、金澤稱名寺內外の人々の不用意は、當局官憲の人々の不管理と相待つて、古書の亡佚をしてますます多大ならしめ頻繁ならしめたやうである。足利學校のがはに在つては內務省が保存資金に金千圓を下附し、栃木縣地方の有志者が聖廟を修繕し圖書を整理し文庫を再建し、春秋の祭典を復興せんとするの企てを起し、而も事上聞に

達して内帑の下賜があつたと云ふのは、明治十四五年の事であつた、同二十九年に至つては更に進んで足利學校遺蹟保存會が設けられた樣な事もあつた。然るに之に反して、横濱の一豪商平沼氏が金澤文庫のために倉庫を建てゝ寄進したのは、右の事どもに刺戟されてのことか否かを知らないが、やうやく明治三十一年に至つての事である。伊藤公の如き先覺者の着眼と地理上の便宜等とを以てして、文庫復興の事業がかくも遲滯したのは種々の理由が算へ擧げられようけれども、とにもかくにも此の昭代の盛事として、神奈川縣の當局が復興の事を成就し、稱名寺が克く所藏の一切を喜寄し、文庫長が奮勵努力して整理の大業を完うしつゝあるは、圖書館界及び古典籍界の一大慶幸といはざるを得ない。内には幸に散逸を免かれたる貴重な典籍と文書とを著錄複製すると同時に、外には廣く圖書館となく收藏家となく文庫舊藏の名篇を博搜し、且つ或は記錄に採り或は書誌に徵して周到に遺篇の目錄を編輯せんことを期し、以て六七百年前における金澤文庫の興隆時代を髣髴せしめんとしてゐる。横山知事の功績、關文庫長の業績、永く本邦の書誌學史上に錄するに足りるであらう。

かくの如き由來を經て、今度いよいよ金澤文庫の一大圖錄其他が發刊せられて金澤氏の遺業が現在成し得る限りにおいて完全に顯彰せられるに至つたのは、昭和年代における圖書事業にあつて蓋し絶倫の美擧と稱せざるを得ない。卽ち蕪辭を草して慶讚の意を表する所以である。

（昭和九年十二月七日識）

『典籍散語』例言

『典籍叢談』を刊行せしより以後約十年の間に書き綴りし同様の隨筆七十餘章を輯めて其の姉妹篇となし題して『典籍散語』といふ。昭和二三年の交一たび上梓を試みしこともありしが、事成らず止みたりしに、今その故紙を併せて新稿と相共に之を世に出すに至れるは、一に書物展望社の齋藤昌三君の懇情に基く。喜悅の念と感謝の意と甚だ切なり。編次と校正とに關しては、翰林藏室の重久篤太郎君の努力に依りしもの最も多し。錄して深謝の意を表す。

本書は上述の如く十年間の近業を集めたるものなりと雖も、二三の舊稿の捨て難きを拾ひて己れのみの思出草となしたるが如きことなきにあらず。且つかれこれの間に時移り人進み物變り智開けて、動もすれば內容時運に後れ、篇中の記述或は齟齬し或は區々たるところ往々にして存せり。每章の末に記入せる歲次を見て讀者の首肯寬假せらるゝあらば幸なり。

輯めたる所の諸篇は、南蠻と和蘭とに關するもの多きを占め、吉利支丹と伊曾保とに涉る文稿の數他の部類のそれを凌駕せり。卽ち挿む所の寫眞も亦おのづから同種の稀覯美本に資るの止むを得ざるに至れり。以下挿繪十數圖のうち本文中に解說なきもの等につきて一言を添ふる所あるべし。

首めにサー・アーネスト・サトー先生の肖像を揭げしは、著者の南蠻研究が此の先達に負ふ所大なるを追憶するの情に出づ。寫眞は昨年刊行せられしバーナード・アレン氏の『サトー追愼誌』に採れり。予別に『薩道先生景仰錄』あり、昭和四年先生遠逝の歲刊する所にして、ぐろりあ叢書第一編に在り。

挿繪中「萬國新聞紙」所載のイソップ物語は、予が舊冬發見せし所にして、慶應三年一月以降橫濱に刊し英國敎師ベーリー先生編と標記せる「萬國新聞紙」の第二集に出づ。同年二月中旬發行の木版美濃紙刷の稀本なり。喩談二篇を挾む。其一は有名なる『鼠の會議』と題する名篇なり、猫の頸に鈴を掛けんと欲する評議を敍せる戲談なり。第二

は『狐猫の智』と題する一篇にして予の本書に收めたるもの、之には挿繪ありて面白ければ本文と共に掲げたるなり。共に所依の原本を明にせず。

慶長九年長崎の吉利支丹學林に刊行せるロドリゲースの『日本大文典』は世界二部を存するのみ。一部は予の屢々引證し又東洋文庫所藏のロートグラフ本の底本たる牛津大學勃氏文庫藏本なるが、他の一部は卽ち玆に撮影して掲ぐる所のクローフォード卿所藏の美裝本なり。萌黃色の緞子の裝幀は、蓋し原裝か或はさなくとも原裝に近きものとおほしく、愛書趣味より言はば、無上の珍籍とすべし。以上二部共にサトー氏の『日本耶蘇會刊行書志』に著錄せる所に依りて知られしものなり。

上田柳村の『伊曾保物語考』は夙く京都の『史學研究會講演集』に出で其の拔刷亦流布して人の珍重せしところなりしが、全集第六卷に收められて更に普く世の認知する所なれば、今詳記するの要なし。

今年はウキリアム・モーリスの生誕一千八百三十四年より正に一世紀を經たり。われら亦記念する所なくんばあらず。卽ち予が愛藏する所の小本『無何有鄕消息』より一二

撮影して示さんとせるなり。東京帝國大學圖書館にはケルムスコット版『チョーサー』の如き善本あれども、有りふれたる此の本を選みたるは簡捷によりしのみ。著者一昨年牛津より河を溯りて其の名地を訪ひ此の舊蹟を探らんと欲して果さざりしを憾めり。偶偶平田禿木君の近著『英文學隨筆・爐に凭りて』の第四一頁あたりを讀みて感いよいよ深し。

カツクストンは英國の伊曾保物語インクナブラとして稀覯版本の隨一なり。一四八四年我が文明十六年の活字本なるが、予が大正十年撮影せしものの外、舊ぐろりあ社の伊藤長藏君が昭和三年七月京都にて予が主催せし伊曾保物語展覽會のために遙々倫敦より取寄せられし數葉の寫眞あり。今はこれに由れり。

題簽は內外共に狩野君山博士の揮毫を煩はし以て此の一小隨筆に光彩を添ふるを得たるを謹謝す。裝幀は用紙並に活字と共に齋藤君が予の趣味を汲みて細心の配意によりて成りしものなり。寫眞等の料を資るを得たるは前記の伊藤君をはじめ東西幾多の先蹤に由りしもの、一々錄するに堪へずと雖も、感銘する所大なりとなす。（昭和九年紀元節の日）

「琅玕記」序文

南蠻更紗以來五六年の間に筆錄せる所の小篇數十を選みて一書と成し題して琅玕記と云ふ。抑も琅玕の名を採りたるは、爾雅に之を西北方之美者に算へしに基きしにあらず說文に之を稱して石にして珠に似たりと謂へるに因みたりとなさんも亦をこがましけれど、本草綱目が諸說に據りて、琅玕は西北山中と南海石厓間とに生ずとなしたるもの、それ或は以て此編に名くるに適せんかと思へり。但、此一冊載する所、南の物とも北の物とも限らず、海の幸か山の幸か、亦之を知らざるなり。

鈴木豹軒博士が遠西より歸朝後程なく題簽を書き與へられしに對して感謝の意深し。津田青楓畫伯が西域より博望侯の將來せしに由來せる所の葡萄の房々を以て裝幀の圖案とせられしは嬉しく覺ゆ。東洋文庫の石田岩井兩君の好意によりて、大莫臥兒國畫院の巨匠が畫ける花下美人圖を口繪の料に供するを得たると共に、其芳情を感銘す。圖は昨

秋來朝の英國詩人ローレンス・ビニヨン氏の大莫臥兒國朝院畫錄に出づ。何人の作なるかを明示せざれど、琅玕記に情趣を添へんと欲して取りしのみ。

出版については改造社の廣田君濱本君比嘉君の懇情を謝し、また校正部諸員の注意を銘記す。剪藏の勞は、姉編たる南蠻更紗の折に倣ひて、其妹洋子に課し、校合の役は亦家庭の諸輩之を分擔せり。卽ち仰々しく申さば一家總動員の業果となさんも不可なし。さはれ太田全齋先生の名著活刷の故事を偲びては恥慣する所なかるべからず。歲月流れて洋々、遠々し海のあなたに住みし人々、今や將に歸り來たつて團欒の樂みを相共にせんとす。希くは幸あれ、人にも書にも。

昭和五年西紀一九三〇年五月七日海東の秩父丸より無線第一信を得たる日これをしるす。　著者

『花鳥草紙』序文

いつも書名によしなき苦勞をする自分も、今度ばかりは、むざうさに花鳥草紙ときめてしまつて、さほど迷ふこともなかつた。卷首の紀行文の面もはじめの方に書いてあるやうな花鳥風月に親しむ情緒を、たぐりいだして編み成したのが、此の一書であるからである。かういふ心もちで、さうは標題を名づけたものの、すぐさま思ひうかんだのは、樂翁公の花月草紙であつた。否、むしろこの名著の名からわが自著の題名をよびおこしたものかも知れない。さうかうした後、やつと原稿をそろへて、いざ小包にして送る段になつて、例のごとくその小包をこしらへてゐた妻が、廣告か何かで見ておぼえて居たらしく、「花のある隨筆」といふ名の本が出たやうですねといつた。さうかな、と受けながしたまま、やがて上京した旅からの歸りに、東京驛の書店で新刊本の棚の上にふと見つけたのが、その隨筆であつた。手にとつて注視すると、裝幀なり印刷なりが先づ氣

に入つてしまつたから、すぐに手に入れて汽車のうちで讀んでゆくと面白くなつて來て、著者山口さんの名も文も初めて知つた自分の迂濶さを今さら恥ぢるばかりであつたが、それにしても今度の自著の書名も、やつぱり花鳥草紙がよいなと獨りうなづいて歸つた。その次ぎの東上の歸途には、荻原井泉水さんの「春秋草紙」といふ本を求めて、これも亦汽車のなかで耽讀して歸つたが、書名の撰びかたの暗合といふものもあるものだなと再び考へつつも、平凡な名への愛著が遂に斷ち切れなかつた。昨夜は榊原紫峰さんの「花鳥畫の本質」と題する新著を客舍で求め讀んで、あすこそは序文を呵成しようと決心したのであつた。

扉と背との文字を煩はした藤井紫影翁が廣島の客地から、それを郵寄せられるのも近きにあるだらう。いつもながらの厚情を多謝するばかりである。出版の話が起つた去年の夏から、出版の曉には裝幀をおねがひするはずになつてゐた川端龍子畫伯が、この新春から東西の朝日新聞の紙上に南洋の風物を畫がいて敍景の妙文をも添へて連載されたのを日毎に感賞しつつ、わたくしはひとりで自著の表裝のことに、なみなみならぬ期待

をかけてゐる。悦ばしい情致である。

出版部の雨宮氏や大阪支局の湯川氏に世話をやかしたのは一通りでなかつた。校正の勞をとられた小暮氏に對してと共に感謝の意を表する。宅での校正は、暮から春へかけて、一に妻にまかせ、その上を自分が一閲することにしたが、毎晩老眼鏡をかけて夜なべの校正にいそしむ妻を見やりつつ、わたくしは、西洋流に一つ思ひきつて、愛妻に捧ぐとでも卷頭に書くことにしようかね、といふ。ぢいさんばあさんの協同作業とでもしておいていただきませうか、と妻が苦笑する。おめでたいことである。

（昭和十年一月十四日東京一ッ橋の客舍にて）

自分の選集についての省慮

今の時勢に新村出選集と題せられて自分の選集が甲鳥書林から出版されるに至つたことは、獨り三省して勿體なさを感じ、同時に羞恥の念のいよいよ深きを覺ゆるばかりである。幾度か退藏し節制し撤回をすら敢てせんとしたけれど、心弱くも人の厚情に甘え熱意に動かされて遂に欣諾するに至つたのは、自分の心臓の弱さ强さがわれながら判らぬ始末である。且つ割合に良質の紙を多量に供給せられた點に於て、ましてや小林古徑畫伯の裝幀を煩はした點に於て、老朽に對する過分の配慮のこれやかれや、自分としてはひとへに深謝深慮たとへなき複雜な感想に打たれざるを得ない。

十數年前にもゲーテの語を引いて告白した如き、いはゆる「一大懺悔の破片」を綴り合はせた此の選集のうちには、うらわかき時分の思ひ出多き業績の棄てがたきものも籠れば、また青春の夢なつかしさに自分で微笑まずには居られぬ文章も少くはない。今

こそ時代後れの嘆こそあれ、世に魁けした知識を世に先んじてそれとなく啓示し闡明したかのやうに感じてうぬぼれ氣味になる論考も多少存しないでもない。自分も嘗て先覺の所說を紹述したことのあつた樣に、後進畏るべく拾遺また擴充を得て出藍の成績に敬服せしめられる際、歡喜の情のそぞろに抑へきれぬこともある。

其折々の自己の知識の程度と情緒の眞實とを、さながら露出した臆面なさは容るして戴くとして、其時代時代の時世裝にも不知不識累せられた語句がないとは云へぬ。それらの甚だしきは、元より修訂すべき筈であるが、其時代年所に相當する名辭と文句とは、當然そのまま保存しておくことにした。咎められても既往は既往として成るべく原狀を保存したさに、未熟未完成と不統一不一致とをさながらに株守する性分の自分は、上智ではなくて下愚だと毀られることを覺悟してゐる。

（昭和十八年九月刊「新村出選集」第一卷附錄）

『典籍雜考』
定價㊈金三圓五十錢
特別行爲稅相當額二十錢
合計 金三圓七十錢

昭和十九年十一月廿日印刷
昭和十九年十一月廿五日發行（三〇〇〇部）

著者 新村出
發行者 古田晁　東京都京橋區銀座西六ノ四
印刷者 森島金治郎　東京都麻布區宮村町七八
配給元 日本出版配給株式會社　東京都神田區淡路町二ノ九

檢印

發行所 東京都京橋區銀座西六ノ四　振替口座東京一六五七六八　電話銀座（57）二〇五六番　株式會社筑摩書房　會員番號一一〇〇七八

（東東1250）　（所本製部體）

著者略歷
明治三十二年東京帝國大學文科博言學科卒業、文學博士
現職—帝國學士院會員、京都帝國大學名譽教授
主なる著書—典籍概說、典籍散語、南蠻廣記、史傳雜考

出版會承認
い一三〇四六二

終